

# 開発こうほう

Hokkaido Development Association

北海道から新しい可能性を発信する

地域経済レポート特集号 / REGIONAL ECONOMIC REPORT

# マルシェノルド

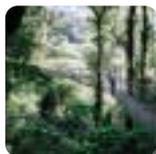
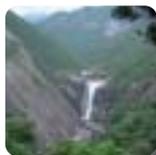
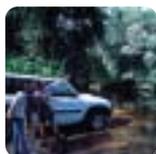
NO  
494

September.2004

9月号

テーマ  
北海道らしい  
エコツーリズムを考える

Ecotourism in Hokkaido



## 北海道らしいエコツーリズムを考える

地域の自然環境を守りながら、持続的な観光を目指す「エコツーリズム」に注目が集まっています。

エコツーリズムのとらえ方は立場によってさまざまですが、自然環境に負荷を与えず、地域特有の自然や生活文化を観察し、学びながら楽しむ旅といえるのではないのでしょうか。また、環境省では、エコツーリズムの概念を「自然の営みや人と自然とのかかわりを対象として、それらを楽しむとともに、その対象となる地域の自然環境や文化の保全に責任を持つ」観光のあり方と考えています。

今年、知床地域が世界自然遺産に推薦され、北海道ではエコツーリズムへの期待が高まっています。しかし、集客による自然環境への負荷と自然保護のバランスをどのように図りながら持続的な発展を進めていくのか、地域の自然や文化をどのように旅行者に伝えていくのか、環境教育の手法や既存産業との連携をどのようにするのかなど、検討すべき課題は多くあります。

そこで、今回は、エコツーリズムの先進地情報やアウトドア型観光の先進事例などから、北海道らしいエコツーリズムについて考えていきます。

## Contents 目次

### インタビュー

#### オーストラリアのエコツーリズムと観光産業 .....01

オーストラリア政府観光局 日本・アジア統括局長代行 グレグ・マッカラン

### 地域事例

#### 北海道初の世界自然遺産登録を目指して .....07

～知 床～

### 地域事例

#### 地域と共生するエコツーリズムを目指して .....14

～国内初の世界自然遺産・屋久島の現状～

### 地域事例

#### 地域と連携する自然体験型の観光地を目指して .....20

～自然体験型事業の先駆け、美瑛・富良野エリアの経験から～

### 地域事例

#### ブナ北限の里づくりとNPOによるエコツーリズムの推進 .....25

～黒松内のまちづくりとぶなの森自然学校～

### レポート

#### コスタリカのエコツーリズム .....29

～エコツーリズムによる持続可能な発展～

### 開発DIARY .....33

### information 告知板

ツール・ド・北海道2004 .....35

オーライ！ニッポン北海道シンポジウム .....36

全日本紙飛行機選手権大会 .....37

オートリゾートフォーラムin道東 .....38

平成17・18年度北海道開発局競争参加資格審査申請説明会開催のご案内 .....39

## インタビュー interview

# オーストラリアのエコツーリズムと 観光産業

「グレート・バリア・リーフ」や「ウルル（エアーズ・ロック）」、「カカドゥ国立公園」など、オーストラリアには15の世界自然遺産があり、エコツーリズムの先進地でもあります。オーストラリア大陸は、何千万年も他大陸と孤立した状態にあり、原始的な生物や太古の地球環境を知ることができる貴重な痕跡を残しており、その観光資源を生かした観光産業が盛んなのです。

そこで、今回はオーストラリア政府観光局 日本・アジア統括局長代行のグレッグ・マッカラン氏にオーストラリア観光の魅力と観光産業、オーストラリアのエコツーリズムについてお話を伺いました。

（インタビュー日 2004年6月3日）

### オーストラリア観光の魅力

砂漠にそびえ立つ世界最大の一枚岩ウルル（エアーズ・ロック）や2,000kmにも及ぶ世界最大のサンゴ礁が美しいグレート・バリア・リーフなど、オーストラリア特有の大自然は、日本にも多くのファンがいます。オーストラリア観光の特徴、魅力は何でしょうか。

**マッカラン：**日本人観光客は、ドイツやアメリカなどの観光客と違って、若い女性や熟年の女性が多いことが特徴です。数年前まではウルル（エアーズ・ロック）やグレート・バリア・リーフなど自然を見ることがやコアラやカンガルーと一緒に写真撮影をするといった旅行が主流でした。しかし、近年は海外旅行市場が成熟し、それだけでなく、体感する旅、参加型の旅、インタラクティブ（双方向）な旅が求められるようになってきました。消費者調査を行ったところ、20～30歳代の女性は自然のなかで癒されたいと思っていることも分かりました。

オーストラリアは日本の約20倍もの面積があるのですが、人口は約1,960万人と少なく、非常に人口密度が低く、豊かな自然があります。北東部には世界最古の森といわれるデイ



オーストラリア政府観光局 日本・アジア統括局長代行

Greg McAllan

グレッグ・マッカラン 氏

1  
世界遺産

1972年（わが国は92年に締結）に採択した「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」に基づいて、顕著で普遍的な価値を有する遺跡や自然地域などを人類全体のための世界の遺産として保護、保存し、国際的な協力及び援助の体制を確立する目的で設けられた登録制度。世界遺産には、世界的な見地から見て歴史上、美術上、科学上顕著で普遍的価値を有する記念物、建造物、遺跡等を対象とした「文化遺産」、世界的な見地から見て鑑賞上、学術上または保存上顕著な普遍的価値を有する特徴ある自然の地域、脅威にさらされている動植物種の生息地、自然の風景地等を対象とした「自然遺産」、文化遺産と自然遺産との両面の価値を有するものを対象とした「複合遺産」の三つのカテゴリーがある。

ンツリー国立公園、海岸部にはグレート・バリア・リーフ、南部には19もの国立公園があるタスマニア島、さらに中央部にはウルル（エアーズ・ロック）など、多くの世界遺産があり、非常に多様性のある国です。そして、重要なことはそこへ安全に、手軽に行くことができるということです。本物のエコツーリズムがあり、エコツアーが手軽に体験できることがオーストラリア観光の大きな魅力です。

オーストラリアにおいて観光産業は現在どのような位置付けにあるのですか。オーストラリアの産業といえば、以前は石炭や酪農などの第一次産業が中心だったように思います。これらの産業から観光産業への転換は政府の主導によるものだったのでしょうか。

マッカラン：現在、国内ではサービス業のなかで観光産業がもっとも重要な産業になっています。雇用の面で第1位の産業となっており、GDPの4.3%を占めています。しかし、一次産業から観光産業への転換は必ずしも計画的な展開ではなかったように思います。どちらかという、ある時期が転機となり、その後積極的に投資をし、開発していったという

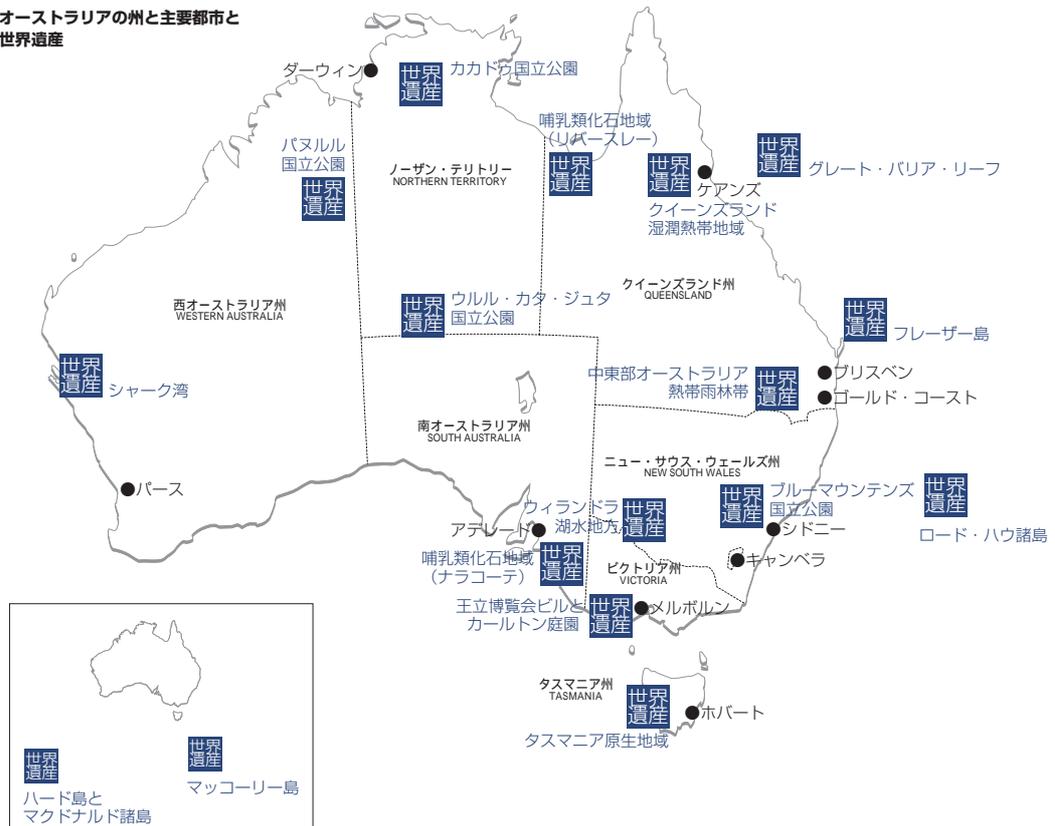
ことでしょう。

ちょうど20年ほど前、映画『クロコダイル・ダンディー』がヒットし、主演俳優のポール・ホーガンがオーストラリア観光大使として、アメリカでキャンペーン活動を行ったのです。このキャンペーンはアメリカで非常にインパクトがあり、この後、観光に力を入れ始めたところ、雇用機会が増え、政府の支援も増えていきました。広告宣伝活動も積極的に進んでおり、今後4年半にわたり2億3,500万ドルの追加予算を投入する予定です。政府の長期的な投資によって、観光産業が発展してきたということはいえるでしょう。

最近、政府は観光産業について白書を発表しており、今後5～10年かけてどのような方針で観光産業を発展させていくかがまとめられています。オーストラリアにとって観光産業がいかに重要な産業になってきたかを示すものだと思います。また、国内にはいい意味で観光産業の波及効果が現れているように思います。

観光産業発展のために、オーストラリア政府観光局はどのような役割を果たしているのでしょうか。

オーストラリアの州と主要都市と世界遺産



マッカラン：オーストラリア政府観光局は国際的なマーケティング組織で、オーストラリアを世界で最高の訪問先にするため、海外にプロモーションしていく業務を担っており、マーケティング活動を積極的に行っています。

オーストラリアの場合は日本と違い、州政府が独自性を持って観光政策に取り組んでいます。例えば、西オーストラリア州の面積はオーストラリア全土の3分の1、日本の6.7倍という広さですから、観光資源も数多くあります。州政府ごとに観光政策があり、州政府単位の観光局の事務所もあります。しかし、州政府の予算はそれほど多くはありません。連邦政府にはある程度の予算がありますから、各州と連携を取りながら、オーストラリア全体の観光促進をしていくという仕組みです。

観光客はクィーンズランド州という州名よりもゴールド・コーストといった具体的な地名で旅行先を決めていきます。そのようなニーズをうまく受け止めて、各州の観光局につないでいくことがわれわれの役割です。

また、オーストラリアの旅行業界と日本の旅行代理店を結び付ける役割も担っています。

### オーストラリアのエコツーリズム

オーストラリアはエコツーリズムの先進地ですが、日本でのエコツーリズムのプロモーションはどのように行われているのでしょうか。

マッカラン：日本でもようやくエコツーリズムの重要性が認識され始めたと感じています。エコツアーをアフリカに売り出そうと思っても無理がありますが、日本ではオーストラリアのエコツアーを一つの先進地の経験として売り出すことができていると思っています。現在は、ウェブサイトやパンフレットを作成して、観光客に向けてPRしており、旅行会社にも積極的な紹介を展開している段階です。でも、こうした活動も数年ほど前に始まったばかりです。



エコツアーではインタプリター（自然解説者）役のガイドの存在は欠かせない

ところで、オーストラリアは世界で初めてエコツアーの認定制度を設けたと聞いています。

マッカラン：オーストラリア政府観光局では、オーストラリア最大の魅力である大自然を楽しむ旅や、環境教育や自然保護を目的とする高度なエコツアーまで、自然と触れ合い、旅を通じて自然の大切さを体験することを「オーストラリアン・エコ」と総称し、三つのステップを設けています。世界遺産を訪ねたり、コアラやカンガルーなどの動物と触れ合う、あるいはファームステイなど、だれでも簡単にできる体験で「自然に親しむ」ことが第一のステップです。第二のステップは、エコツアーガイドが同伴するツアーに参加するなど、自然の生態を学びとる体験ができる「自然を学ぶ」旅です。そして、植林ツアーへの参加など、自然保護を目的としたプログラムに参加し、エコツーリストとして活動の一端を担う体験をする「自然を保護・修復」する旅が第三のステップになります。見るだけでなく、学ぶ、理解するプログラムがあり、観光客の目的に合わせて三つのレベルに分かれているところがポイントです。



ロックワラビーなど動物との触れ合いはオーストラリア観光の魅力の一つ

ご質問があったように、オーストラリアでは、オーストラリア・エコツーリズム協会が運営する世界で唯一のエコツアー認定制度があります。これは、Nature and Ecotourism Accreditation Program、通称NEAP（ニープ）と呼ばれており、自然をより深く理解し、楽しめるような体験を重視している、自然保護に対して積極的な貢献をしているなどの条件に基づいて、エコツアーのプロダクト（エコツアーの旅行者やガイド業、宿泊施設など）を三つのレベルに分けて認定しているのです。また、オーストラリア政府観光局では、NEAPの認定を受けた商品を含んだツアーを「オーストラリアン・エコツアー」として認定し、エコツアー選定の基準となるように努めています。オーストラリア国内ではNEAPの認定数も増加しており、私が見たところ、NEAPはうまく運営されているように思います。やはり、観光においてはインタラクティブであるということが重要なキーワードになっているのだと感じます。

私自身も4月に屋久島でトレッキングツアーを体験しましたが、写真を撮ることだけが旅行の楽しみではありません。ガイドが同伴して自然についていろいろと学ぶことができた屋久島のエコツアーは非常に楽しい経験でした。

北海道ではアイヌ文化が地域固有の文化としてあります。オーストラリアの先住民であるアボリジニの文化は、重要な観光資源になっているのでしょうか。

マッカラン：アボリジニ文化は今から5～6万年前から構築されたもので、現在は移民者と協調し、理解を深めながら独自の生活文化を築いています。アボリジニ民族の伝統や文化が現在のように深く理解されるまでには30年くらいかかりましたが、今ではアボリジニ文化についてもインタラクティブな体験が可能です。アボリジニ民族のパフォーマンスを鑑賞することもできます。

しかし、残念ながら、日本を含めたアジアの観光客は、アボリジニ文化よりも自然の方に興味を持っているように感じます。観光には異文化を知り、体験する楽しみがありますが、その点では日本人よりも欧米の方が強い興味を示しています。先住民族の文化、伝統をしっかりと伝えていくことは観光政策にとっても大切なことだと思います。

オーストラリアには多くの世界遺産がありますね。

マッカラン：2004年7月現在で国内に16の世界遺産があります。その多くが自然遺産ですが、4カ所は文化遺産の登録も受けた複合遺産です。それらの世界遺産地域には安全に移動できる交通手段があることがポイントです。デインツリーの熱帯雨林、アボリジニの壁画が見られるカカドウ国立公園など、それぞれに違った魅力があります。

しかし、貴重な自然環境を守りながら観光客を受け入れることはなかなか容易ではないでしょう。観光客への規制、制約を設けることもしているのでしょうか。

マッカラン：そうです。勝手にたくさんの観光客が来るようになれば、自然が破壊されてしまいます。例えば、世界遺産でもあり、オーストラリア最大の国立公園でもあるグレート・バリア・リーフは、国の機関であるGBRMPA（Great Barrier Reef Marine Park Authority）が管理していますが、大小2,500あるサンゴ礁の一つひとつを使用目的に合わせてゾーン分けして規制を行っています。ダイビングやクルーズ、フィッシングなどのレジャー目的で利用許可が下りているのもごく限られたエリアです。また、クルーズに利用する大型の桟橋やダイビング船係留に使うブイの設置なども厳しく規制されています。ここを訪れる観光客からは4ドルのリーフトックス（環境保護税）を徴収し、GBRMPAの調査活動の資金として活用される仕組みにもなっています。

一方、西オーストラリア州のモンキー・マリアには野生のイルカがおり、観光客が気軽に餌付けを体験できますが、一度にたくさんの人が海に入れば、イルカは驚いて、二度とやって来なくなってしまうでしょう。しかし、餌付けに立ち会うレンジャーがいることで、彼らがそれを管理することになるのです。レンジャーやガイドは管理や監視という面で、その役割は非常に大きいと思います。

タスマニア州では、ボードウォーク（板張りの遊歩道）によって、地面を直接歩かせないようにして自然を保護している例もあります。自然を守るために人数をコントロールすることは非常に大切です。

私が先日体験した屋久島のトレッキングでは、多くの人々が並んでいる状況で、1日当たりの制限人数を設けて自然を守る必要があるように感じました。エコツーリズムでは自然を守る責任がありますが、その理解を得るた

めに非常に時間がかかるのも事実です。しかし、持続的な観光を目指すためには、制限や規制を設けることも必要だと感じます。

例えば、西オーストラリア州には、地球最古の生命体であるストロマトライトのような大変貴重な自然が残されています。

マッカラン：ストロマトライトは、35億年前に生まれた原核生物の藍藻「シアノバクテリア」が光合成を行って、その分泌物で形成された生きたまま石化する生物です。バクテリアが作り出した岩のように見える生物の塊と考えると分かりやすいと思いますが、化石でなく、生きたストロマトライトを見ることができるとは世界でも非常に珍しいことで、これらを見ることができる地域を含めて世界遺産に登録されています。そのような貴重な自然が破壊されていくことは決していいことではありません。

われわれはその自然環境を守っていかなければなりません。エコツーリズムを推進する地域として、そのような貴重な自然を存続させていくことは、一つの大きな役目であると思っています。

'80年代には、ゴールド・コーストに多くのゴルフ場ができ、自然環境を破壊してしまいました。しかし、今や政府観光局の役割は、ゴルフ場のようなレジャー施設を作ることではなく、自然環境を保護し、現在の自然環境を未来に引き継いでいくことです。今のままの自然を次代に残していくことが観光産業の大きな役割であると思っています。



## オーストラリアと北海道

ところで、マッカランさんは北海道にいらっしゃった経験はあるのですか。

マッカラン：はい。2、3年前のクリスマスに家族でスキー旅行を楽しみました。とても美しい所で、北海道への興味がわいてきました。

オーストラリアへは、東京や大阪、福岡、名古屋からの観光客は多いのですが、逆にオーストラリアから日本に来る観光客は少なく、ほとんどがビジネス客なのです。しかし、北海道とオーストラリアは季節がまったく逆で、オーストラリアでは夏なのに北海道ではスキーが楽しめるという魅力があります。オーストラリアから毎年4,000～5,000人が北海道にスキーに行くというデータもあります。これまでは成田空港経由でしたが、今年の11月から<sup>2</sup>ケアンズ-新千歳の直行便が再開されることになりました。直行便就航再開には、私もあちこち走り回りましたが、互いにインバウンドとアウトバウンドのバランスが取れる定期便になると期待しています。北海道に行くオーストラリア観光客は増えており、自然、スキー、温泉旅館など、北海道には魅力的な要素があり、観光需要のバランスが取れるという点で、非常に興味深い地域です。

知床が世界遺産に登録されれば、写真を撮って帰るだけの旅でなく、参加型の旅行も積極的にプロモーションできます。屋久島のエコツアーのように、また参加したいと思わせるような体験型の旅行を提案することで、人気はますます高まると思います。

最後に北海道がエコツーリズムを推進していく上でのアドバイス、そして北海道へのメッセージをお願いします。

マッカラン：北海道では知床が世界遺産に推薦されていますが、政府には自然を保護・管理する役割があります。レンジャーやガイドなどの存在も重要です。エコツアーを推進す

る上では、NEAPのような認定制度を考える必要があるのではないのでしょうか。そして、機動的な団体や組織などでそれを管理・運用していくことが重要です。

私は、北海道の人々は自然に対して深い理解があると感じており、正しい方向でプロモーション活動を地道に続けていけば、北海道の観光産業はまだまだ伸びる可能性があると思います。

また、北海道にはオーストラリアとは違った魅力があり、この点は北海道に住む人にとっても、オーストラリアに住む人にとっても、観光地として相互にメリットがあると思います。季節がまったく逆で、世界遺産のようなそこにはかない魅力もあります。北海道はまだ観光の可能性を出し切っていないと思いますから、ケアンズ-新千歳便の再開で、互いに新しい市場開拓につながればと思っています。

今日は、お忙しいところ、ありがとうございました。

聞き手 釧路公立大学教授・地域経済研究センター長 小磯修二(こいそ しゅうじ)

### <sup>2</sup>ケアンズ-新千歳の直行便

オーストラリア航空が'04年11月3日～'05年3月26日まで、新千歳とケアンズ間を週2往復便(水・土)運航することを決定。同社による日本国内の定期便運航は名古屋、関西空港、福岡に次いで4都市目。北海道とオーストラリア間の直行便運航は、'98年にカンタス航空が運休して以来6年ぶりとなり、北海道、オーストラリアともに期待が寄せられている。

取材協力：高山有紀子(オーストラリア政府観光局日本地区広報部長)、パーカー・クリストファー(株式会社オズマビジュアルPR6部シニア・アカウント・エグゼクティブ)  
3・4ページ写真提供：オーストラリア政府観光局

### PROFILE

オーストラリア政府観光局 日本・アジア統括局長代行

Greig McAllan (グレッグ・マッカラン)

西オーストラリア州政府観光局を経て、'87年にニュージーランド・南太平洋のエリアマネージャーとしてオーストラリア政府観光局に入局。同局では、北東アジア市場開発マネージャー、西日本エリア・マネージャー(大阪)・コンシューマー・マーケティング・マネージャー(東京)などを歴任し、'98年より日本地区局長、'04年7月より日本・アジア統括局長代行。

# 北海道初の 世界自然遺産登録を 目指して

～知床～



今年1月30日、斜里町と羅臼町の約56,100haが世界自然遺産の候補地として、日本政府からユネスコに推薦されました。世界遺産登録には、地域産業を巻き込んだエコツーリズム定着への期待が膨らんでいます。北海道初の世界遺産登録を目指す知床のこれまでの経緯や現状、課題などについて、関係行政機関や民間団体からお話をお聞きしました。



## 自然を愛する心を引き継ぐ知床の歴史

ヒグマやエゾシカ、絶滅の恐れが指摘されているシマフクロウをはじめ、オオワシやオジロワシなどの鳥類、さらにトドやアザラシなどの海獣類も見られ、日本に残された数少ない秘境として原生的な自然環境を残す知床。知床半島の38,633haは1964年に知床国立公園に指定されており、早くから全国の観光客を集めています。

知床半島斜里側の岩尾別地区に初めて入植者がクワを入れたのは大正初期でした。しかし、岩尾別地区は、耕作に適さない土地であったこと、水確保の困難さ、バツタの大発生や厳しい寒さなどによって11年後に全戸が退去。昭和に入り、再びこの地区に

入植が始まりますが、このときも離農者が相次ぎ、国立公園指定の2年後には、全戸が離農し、岩尾別地区の開拓は途絶えることとなったのです。その5年後、「知床旅情」の大ヒットで知床は大変な観光ブームに沸きます。

岩尾別の開拓に終止符が打たれた後、日本は列島改造ブームによって、あちこちで土地の買い占めが始まります。知床の開拓跡地も不動産業者に狙われることとなり、この土地ブームによる乱開発から原野化した開拓跡地を守ろうと、当時の藤谷豊斜里町長の発案で始まったのが「しれとこ100平方メートル運動」でした。一口8,000円で1区画100㎡の「心の地主」になってもらい、その資金で土地の買い取りと植林を行うものです。’77年に始まったこの運動は、日本で最初の本格的なナショナル・トラスト運動として注目を集めるとともに、国内の環境保護運動に大きな影響を与えてきました。そして、20年後の’97年に延べ参加者49,000人、寄付金総額5億2,000万円となり、447haの土地が保全され、当初の土地保全の目標がほぼ達成されています。その後、「100平方メートル運動の森・トラスト」として運動は継続し、現在も原生林と自然生態系の再生を目指した活動が展開されています。

また、斜里町は、当時としては画期的な斜里町自然保護条例を’72年に制定し、町内全域の自然保護を定めているほか、’74年には羅臼町と合同で知床憲章を制定し、知床の自然が人類共有の財産であることを確認するとともに、貴重な自然を永く子孫に伝えることを明確にするなど、自然保護への姿勢を貫いてきました。

一方、国立公園以外では’80年に遠音別岳周辺の1,895haが国内でも5カ所しかない厳しい規制を持つ遠音別岳原生自然環境保全地域に指定され、’82年には国指定知床鳥獣保護区が、’90年には知床森林生態

系保護地域が指定されるなど、さまざまな制度によって知床の自然環境の保護・管理が強化されてきました。

このような経緯をたどりながら、知床は道内だけでなく、全国的に見ても、残された自然を次代に引き継ぐ貴重な地域として知られるようになったのです。

### 世界遺産登録を目指して

’93年に鹿児島県の屋久島と、青森・秋田両県にまたがる白神山地が世界自然遺産に選ばれたころ、斜里町では世界遺産とはどのようなものなのかについて調査を開始しています。翌年、知床国立公園指定30周年をきっかけに、羅臼町とともに世界遺産登録への取り組みについて検討を始め、’96年度に斜里町が、’97年度には羅臼町がそれぞれの長期総合計画に世界遺産登録への取り組みを明示しています。そのころから地元では世界遺産登録への動きが活発になります。国際的な自然保護機関で、ユネスコの世界遺産委員会に対して自然遺産に関し技術的な評価を下す公式諮問機関であるIUCN（国際自然保護連合）の副委員長を地元へ招待したほか、先進地屋久島の視察、資料集の作成と関係機関への配布、行政への世界遺産登録推進要望書の提出、住民説明会など、早くから世界遺産に向けた積極的な活動が行われていたのです。

国内の世界遺産は、自然遺産が屋久島と白神山地の2地域なのに対して、文化遺産はこの6月に新たに登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」を含めて10地域です。これは、自然遺産が「地形・地質、生態系、自然景観、生物多様性」という四つのクライテリア（評価基準）のうち一つ以上（ただし、の場合は二つ以上）に適合する世界的に見てたくいまれな価値を有し、かつ、「評価される価値に関し、

1 ナショナル・トラスト

1895年にイギリスに設立されたのが始まり。市民から寄付金や寄贈を募ることにより、土地や建物を買い取ったり、あるいは保全契約を結ぶことで、貴重な自然や歴史的価値のある建物を保存・公開し、後世に伝えていくこととする環境保全活動。

2 四つのクライテリア

地形・地質は「過去の生命の歴史や地球の歴史の証拠となるような、重要な地形・地質等がよくあらわれている地域」でアメリカのグランド・キャニオン国立公園など、生態系は「現在も進行中の生物の進化や生物群集の見本となるような、極めて特徴のある生態系を有する地域」で白神山地など、自然景観は「ひとときわずくれた自然美をもった自然現象や景観を有する地域」でアフリカ・タンザニアのキリマンジャロ国立公園など、生物多様性は「絶滅危惧種の生息地や、生物多様性の保全上最も重要な生物が生息・生育する地域」で南米エクアドルのガラパゴス諸島など。

既登録の類似の自然遺産等と比較して、評価される価値の優位性・独自性が明らかであり、十分な規模と必要な要素を持っていること、「法的措置等により、評価される価値の保護・保全が十分担保されていること」という二つの条件を満たしていなければならないという厳しい登録基準があるからです。文化遺産の場合は歴史や美術、科学など、世界的に見て独自性があることを証明しやすいのですが、自然遺産の場合は、世界的に見てどのような優位性があるかを説明することはなかなか難しいのです。

屋久杉の生育地であり、亜熱帯から亜寒帯、九州から北海道までの気候が一つの島に見られるという屋久島、世界最大級規模で原生的なブナ天然林が残る白神山地の国内初の自然遺産登録当時は、日本に残る自然について、国内全体の評価が十分できていませんでした。そこで、環境省では、まず国内全体を見渡し、科学的な評価をした上で、世界自然遺産にふさわしい地域を選び出すという慎重で手間のかかる対応をしてきたのです。

そして、ようやくこうした作業を経て、昨年5月に世界自然遺産候補地に関する検討会が行われ、知床、小笠原諸島、琉球諸島の3地域を選定し、10月に国内の推薦地を知床に決定したのです。選定地のなかでも知床は、国立公園や原生自然環境保全地域、鳥獣保護区、森林生態系保護地域など、既にいくつかの法的措置によって、自然保護の担保がなされている点が大きな要因だったといえます。

この決定を前に地元では、'02年12月に「羅臼町・知床世界遺産登録推進会議」が、斜里町では'03年6月に「知床の世界自然遺産登録をめざす斜里町民会議」が設置され、また決定直前の'03年9月には関係機関・地元自治体・団体を含めた「知床の世界遺産登録に向けた準備会合」などが開催されていました。

次期推薦地に決定した後は、関係機関・団体との

密接な連携・協力を図るための連絡調整を目的として、環境省自然環境局東北北海道地区自然保護事務所、林野庁北海道森林管理局、北海道環境生活部、網走支庁及び根室支庁、斜里町、羅臼町といった行政機関と推薦地の管理にかかわりの深い関係団体で構成する「知床世界自然遺産候補地地域連絡会議」が設置され、推薦書に添付される候補地の管理計画の作成に着手し、今年1月に計画を決定。ようやく日本として正式に知床が世界遺産の候補地として推薦されたのです。

#### 世界遺産候補地の管理計画について

先の管理計画は、昨年10月から4回にわたる地域連絡会議によってまとめられたものです。連絡会議には、両町の「知床の世界自然遺産登録をめざす斜里町民会議」や「羅臼町・知床世界遺産登録推進会議」のほか、両町の漁協や「ウトロ地域自然保護と利用に関する協議会」など、地域団体がオブザーバーとして参加し、管理計画案の段階で、一般からの意見募集も行われ、短期間ながらも地域の理解を図りながら進められました。

この段階で、懸念されたのは、既に一定の規制が行われている知床で、さらに規制が厳しくなるのではないかという地元側の不安でした。しかし、管理計画では既存の法的枠組みで管理することを基本路線としています。また、これまでは各省ばらばらに管理されていたものが、連絡会議の設置によって連携が図られることにもなります。

知床の推薦地域には、陸域のみでなく、7,400ha



の海域が含まれていることが一つの特徴です。管理計画には、候補地が原生的な自然環境が保全されている数少ない貴重な地域であること、急峻な山々や切り立った絶壁が今まで豊かな自然を開発から守り、多くの野生生物を育ててきたこと、世界で最も低緯度に位置する季節海氷域の特徴を反映した海洋生態系が陸上生態系と連続することで複合生態系を形成する仕組みを示す顕著な見本であることが指摘されています。

流氷がもたらす栄養分によって、植物プランクトンが大量に増殖し、そこから魚類、鳥類、哺乳類などの食物連鎖が、海～川～森の各生態系にわたるダイナミックな食物連鎖網を形成しているわけです。さらに、動物や植物は北方系と南方系の両系の種が混在し、さらにシマフクロウやオジロワシなど、国際的な希少種の重要な繁殖地や越冬地にもなっています。

管理計画策定の過程では、海域が登録地域に含まれていることから、特に漁業関係者から漁業を営む上での不安の声が上がったようです。これまで漁業については、漁業法や水産資源保護法などに基づく規制があり、世界遺産登録に際して、新たな規制を設けることは考えられていません。しかしながら、例えば、漁業被害をもたらすトドやアザラシなどに対し、世界的な保護の機運があるなかで、絶滅の危機にある種と漁業との関係をどう調整していくかという課題があるのです。また、使われていない番屋をそのまま放置していいのかという問題もあります。

世界遺産に登録されれば、世界中から自然に対して関心の深い観光客がやってくる可能性が高く、彼らの目は地域に対して厳しい評価を突き付けることもあるでしょう。法的な規制より、むしろこちらの方が地域にとっては難しい課題となるかもしれません



知床の世界遺産推薦を受けて、道東ではラムサール条約の湿地登録へ声を挙げる地域が見られるなど「自然環境保全への意識が高まる波及効果が見られる」と鳥居次長。

ん。しかし、今後、さまざまな課題に直面した時、「行政が一方的に対応策を決めるのではなく、地域とともに悩みながら対応を検討していきたい」と、環境省自然環境局東北道地区自然保護事務所の鳥居敏男次長はいます。

国内で世界遺産に海域が含まれる地域は知床が初めてであることから、知床らしいエコツーリズムの確立や知床ブランドの海産物など、世界遺産登録を前向きに受け止めていくことが、こうした課題を解決する鍵になるのではないのでしょうか。

### 知床のエコツーリズムの現状と課題

管理計画では管理の方策の一つとして「自然の適正な利用」を掲げ、観光などについては世界自然遺産としての価値を将来にわたって損なうことなく、適正に利用されるために、知床の原生的な自然にふ



知床財団がある知床自然センターはエコツーリズムの拠点。案内窓口がありパンフレットも置かれている。



知床自然センター裏を出発、フレベの滝を見学できる散策コース。ガイド付きで歩く人も多い。

さわしい利用ルール（「知床ルール」）づくりを進めること、必要に応じて一定の制限を設けること、利用の分散と利用者の適正な誘導、さらに自然を大切にしながら地域の発展を図るエコツーリズムのあり方について検討することが明記されています。

知床では'88年に、知床国立公園の自然環境に関する調査・研究、自然保護思想の普及啓蒙等の事業を行うために、斜里町が「財団法人知床財団」を設立しています。財団では'91年からガイド役の自然解説者が引率する本格的なエコツアーを開始しています。

また、岩尾別コースホステルでも早くから宿泊客を対象にした知床五湖のネイチャーウォッチングを始めており、現在は宿泊業だけでなく知床アウトドアセンターとして活動しているほか、地元のネイチャーガイドらで結成された知床ナチュラルリスト協会（NPO法人SHINRA）など、民間のガイド事業者も徐々に増え、さまざまなエコツアーや自然体験活動が展開されています。斜里町に比べると数は少ないものの羅臼町でもガイド事業者が立ち上がるなど、今年4月現在で、斜里町と羅臼町で18事業者、合わせて40名ほどのガイドが活動しています。知床以外の地域からやってきた人が多いのですが、なかには本業が漁業というガイドもあり、定置網の補修のために海に潜る技術と自前の道具を生かして、冬期間はドライスーツを着て流氷の上を歩く「流氷ウォーク」を行うという意外なガイドもいます。

知床は、屋久島の屋久杉のような固定されたものがあるわけではなく、また知床の自然を象徴するシマフクロウやオジロワシ、ヒグマなどを必ず見ることができる場所があるわけではありません。海、山、森、川という一体的な自然環境の豊かさを理解する上でもガイドの役割は非常に重要です。6月から7月にかけて、展望台を除く知床五湖遊歩道が全面閉鎖されていた背景には、ヒグマに対する知識を観光客

が理解していなかったために、ヒグマを必要以上に興奮させてしまった面があります。観光客の情報不足によって、さまざまな波紋が広がってしまい、こうした事態を未然に防ぐためにもガイドの存在を改めて見直した方もいるのではないのでしょうか。観光客に正しい知識を知ってもらうために十分な知識と能力を持ったガイドの役目が重要であることを痛感する出来事だったといえます。同時に、知床に関する情報を広く早く正確に伝えていくことの難しさも実感したのではないのでしょうか。

北海道の自然体験観光は夏期を中心としたものが多くなりがちですが、知床では流氷ウォークなど、冬期の活動も盛んです。こうした新しいプログラム開発の面でも、ガイドの役割は非常に大きいといえます。

ガイド間の交流は、岩尾別コースホステルの関口均代表の呼びかけで、2年前から地元のガイドや関係機関の職員などを集めた親睦会が開催されていました。しかし、知床地域のガイドたちが一堂に会した組織はなく、ツアー中に顔を合わせて挨拶をする程度だったといえます。

そして、世界遺産登録に向けた動きやガイドの役割の重要さの理解が深まってきたことなどを受け、4月21日に「知床ガイド協議会」が設置されました。具体的な活動内容はまだ検討段階ですが、今後はガイド技術や安全管理能力の向上、ルールづくりなど、さまざまな要件の議論がなされていくことが期待されます。また、協議会の事務局を務める知床財団の松田光輝普及事業係長は「組織化することで、外部の組織と連携が取れ、より効果的、効率的なことがこれからは出てくるでしょう」といいます。世界遺産登録前の段階で、ガイドの組織化はエコツーリズム推進の上でも大きな柱になるといえるでしょう。

このような状況にあるものの、これまでの知床の

知床に移り住んで17年という関口さん（写真右）とともに知床アウトドアセンターでガイドを務める西田杏奈さん（写真左）は「一人のお客さんが増えるよりも同じ人が2泊してくれることが大事」という。



ガイドも務める松田係長は、エコツアーは「エージェント主導ではなく、ガイド主導で企画運営することがポイント」という。



観光全体を見渡すと、海外の先進地に比べるとエコツーリズムが広く定着した状態とはまだ言い切れません。大衆観光・大量観光のマスツーリズムが中心で、これにエコツーリズム的要素を付加させたツーリズムであったといえます。今後は、本物のエコツーリズムの展開を目指すため、個人や少人数制の滞在型エコツアーの定着を図る必要があります。

これまでの経緯や産業への波及を考えるとマスツーリズムを否定することはできませんが、その兼ね合いを図りながら、知床ならではのエコツーリズムを検討していくことが今後の焦点となるでしょう。また、旅館や土産品店などの観光事業者だけでなく、農業や漁業など地域の一次産業も巻き込んだ、官民一体の枠組みで地域をあげてエコツーリズムを推進していくことも重要なポイントです。

例えば、屋久島には観光名所に地元の集落住民によって運営されている土産品店があります。屋久島では屋久杉工芸品が土産品として有名ですが、そこで取り扱う商品は地元の工芸事業者のものばかりで、商品を整形する段階で出た杉の木屑も香りを楽しむ

ためにパッケージして低価格で販売するなど、地域資源を有効に活用するこだわりが感じられます。雇用だけでなく、域内調達を優先するなど、地元産業が潤う仕組みを意識した取り組みがあるのです。

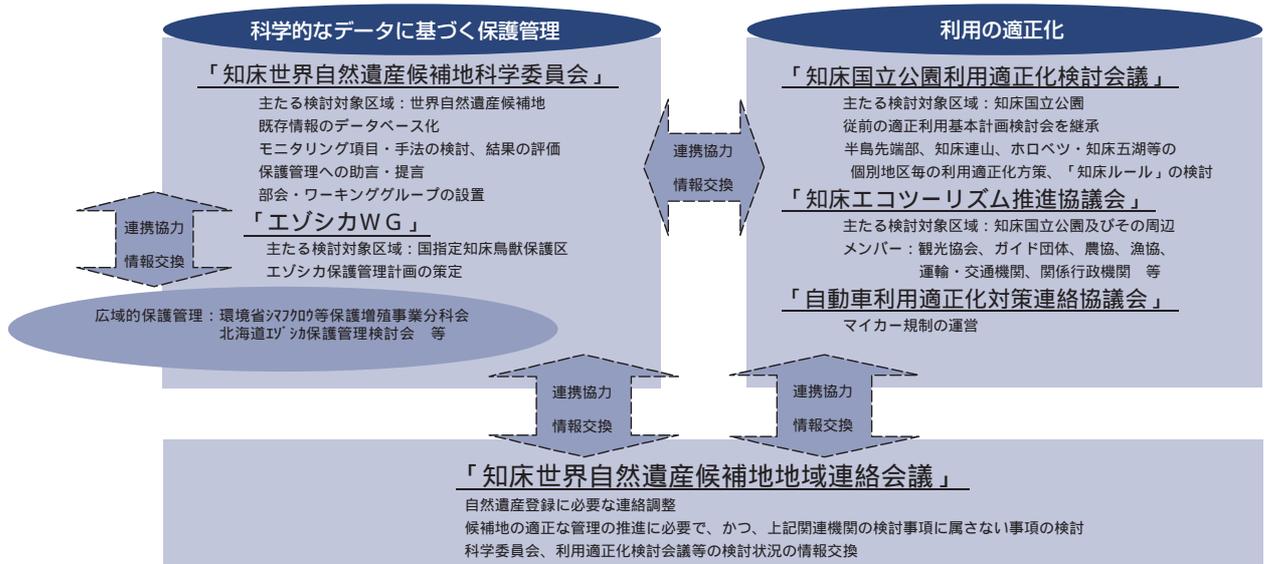
地域一体となったエコツーリズムに向けては、6月に選定された環境省のエコツーリズムモデル事業をはじめ、いくつか検討の動きがありますが、自然環境を守りながら地域経済の安定に寄与する本格的なエコツーリズムに向けて、さまざまな角度から柔軟な発想で取り組んでいくことが期待されます。

### 徐々に強まる地域間の絆

知床観光の一つの大きな強みは、大手の外部資本業者が少なく、地元資本がほとんどである点です。このため、「宿泊施設では業者が団結し、地域の発展を目指して活動してきた」とウトロにある知床グランドホテル北こぶしの桑島繁行社長はいます。

数年前から漁協や農協との協力のもと「知床番屋祭」が開催されるなど、観光業者と地域産業の連携も徐々に見られるようになってきました。海域を含

知床関連機関の連携状況



3 エコツーリズムモデル事業  
 環境省が設置したエコツーリズム推進会議によって検討された方策の一つ。ほかにエコツーリズム憲章、エコツーリズム総覧、エコツーリズム大賞、エコツーリズム推進マニュアルなどの施策があげられている。

網走地区観光連盟の会長も務める桑島社長。北こぶしには、地元産品にこだわった料理が「味わえる和風料亭「木風」も。



めた食物連鎖の体系がコンパクトにまとまった地域として世界遺産登録ということになれば、地産地消、スローフードの機運などからも一次産業への注目は高まるでしょう。また、ガイドと宿泊業者とのつながりは、今のところ個々の連携によるエコツアーの受け入れとなっているようですが、ガイド協議会の設立を受け、今後はさらに強い結び付きになることが想定されます。

こうした地域の連携が少しずつ培われていくなかで、地域内からの調達、地域からの投資を高めながら地域循環型の経済基盤が整っていくことで、知床らしいエコツーリズムが確立されていくのではないのでしょうか。そのためにも、観光客の消費をしっかりと地域で受け止める産業間の連携、仕組みづくりが望まれます。

#### 世界遺産をきっかけに地域が一つに

世界遺産は登録されることが目的でなく、遺産をどのように後世に残していくか、その後の管理が最も重要です。同時に世界遺産は自然環境保全だけでなく、生活環境や産業など、住民の暮らしのさまざまな側面に波及するものでもあります。

「人間の生活を含めて、どのように野生動物と共生していくのか。羅臼と斜里がこれまで進めてきた自然環境と共生するまちづくりを、世界遺産をきっかけにさらに進めていくことが目標です」と羅臼ビジターセンターの羅臼町環境課自然保護係の田澤道広係長は話します。一方、斜里町総務環境部環境保全課の村田良介課長はエコツーリズムの推進について、「既にエコツーリズムの下地はできていますが、諸外国に比べればまだまだ本物ではありません。そこからもう一步踏み込んで、かつ、地元の産業との関連をどのように組み立てていくのか、地域産業としての展開方法を構築したいと考えています」とい

います。

現在、知床の世界遺産登録にかかわる関連組織としては、知床世界自然遺産候補地地域連絡会議に加え、科学的なデータに基づく保護管理を検討する各分野の専門家によって構成される「知床世界自然遺産候補地科学委員会」が立ち上がっています。また、既に設置されている「知床国立公園利用適正化検討会議」と「知床国立公園カムイワッカ地区自動車利用適正化対策連絡協議会」、7月に設置された「知床エコツーリズム推進協議会」では国立公園等の利用の適正化について検討することとなっています。これらの会では連絡調整や情報交換を行い、世界遺産登録に向けてさまざまな検討を行っています。例えば、利用の適正化については、一昨年自然公園法が改正され、利用調整地区としてエリアを指定し、入込数を法的に制限できるようになったことを受けて、こうした制度の活用やガイドラインの作成など、積極的な検討を始めています。

7月21日～25日にはIUCNのデビッド・シェパード保護地域事業部長が知床を訪れ、世界遺産の登録審査に当たって重要な判断材料となる現地調査が終了しています。6月末に中国で開催された第28回世界遺産委員会では、新規に登録された自然遺産は5件のみで、厳しい審査の様子がうかがえます。

知床の世界遺産登録の採否は、来年7月の世界遺産委員会で決定されます。いずれにしても、知床での取り組みは、今後のわが国の世界自然遺産推薦やエコツーリズム推進において、早くから自然環境保護を貫いてきた歴史とともに、貴重な経験となることでしょう。



先進地・屋久島を視察したという田澤係長。



量から質だけでなく、「地元の漁師と体験を通じてつながりができることなどもエコツアーの効果」と村田課長。



国内初の世界自然遺産・屋久島の現状

# 地域と共生する エコツーリズムを目指して



鹿児島空港から飛行機で約30分。周囲130kmほどの屋久島は、東北の白神山地とともに1993年12月に日本で初めて世界自然遺産に登録された地域です。海岸部と山岳部の標高差が2,000m近くあり、独特な生態系が見られ、トレッキングや登山、カヌーなどのエコツアーも盛んで、ガイドセミナー講演会や研修会など、エコツーリズムを支援するさまざまな取り組みもなされてきました。

世界遺産登録から10年を経過し、国内のエコツーリズム先進地である屋久島を訪ねました。



## 屋久島の魅力と屋久島環境文化村構想

屋久島は、北に上屋久町、南に屋久町と、共に人口7,000人弱の二つの町で構成されているほぼ円形の島です。屋久島は、一般に樹齢500年ほどといわれている杉の日本の南限で、樹齢2,000年、3,000年といった長寿の杉が多く残されています。これは、年間4,000~10,000mmもの多雨に恵まれている特殊な自然環境と、屋久杉の樹脂の特性が起因しています。屋久島は花崗岩で栄養分が少ない土地柄のため、杉の生長が遅く、年輪の幅が緻密になり、硬い材となって普通の杉の6倍もの樹脂がたまるのです。この樹脂は防腐・防菌・防虫効果があり、長く生き続けられるのだといえます。

このように屋久島は日本特有の優れた杉の生育地であり、標高差によって南から北の植物へと連続的に変化する植生の垂直分布が見られること、照葉樹林が広範囲に原生状態で残されていることなどが評価され、島の約20%が世界遺産に登録されたのです。

屋久杉はその昔、神木としてあがめられ、伐採されることはなかったのですが、江戸時代になると森林の50~70%が伐採、明治時代には森の大部分が国有化され、昭和40年代の高度経済成長期に大規模な伐採が行われました。しかし、'71年に大規模伐採の中止を求めて「屋久島を守る会」が結成され、また上屋久町でも「林地活用計画」をまとめるなど、地元の働きかけで屋久杉の保全が図られるようになったのです。

'90年になると、鹿児島県が鹿児島県総合基本計画に「屋久島環境文化村構想」を戦略プロジェクトに位置付けます。翌年4月、県は「日本の屋久島」・「世界の屋久島」という視点から計画の理念を検討するため、日本を代表する知識人による「屋久島環境文化懇談会」を設置。一方、地元の有識者による「屋

久島環境文化村研究会」も設置され、両会による意見交換が行われました。世界遺産への登録は、屋久島環境文化懇談会の委員のアイデアでした。日本の世界遺産条約批准は'92年で、当初は地元も「世界遺産って何?」といった様子だったといえます。同年9月に政府は屋久島を世界遺産に推薦することを決定し、その2カ月後の11月に県は'92年屋久島環境文化村構想マスタープランを発表しています。

同構想では、屋久島の自然・文化の価値や個性を見据え、「自然環境の保護と地域振興の同時解決をめざす」こと、「その根拠を、屋久島の自然の傑出性と歴史的に形成されてきた自然と人とのかかわり（環境文化）に求め」、「環境文化村は、自然と共生する新しい地域づくりをめざす試み」と、基本理念を打ち出しています。この基本理念のもと、環境文化村として、環境学習・研修施設の整備、環境形成事業の展開、ボランティア協力事業の推進、新たな地域産業の創出、国際的な交流の展開の五つを事業の柱としています。

世界自然遺産への登録は、屋久島環境文化村構想を推進する大きなステップとなりました。また、'01~'10年度の県政の基本計画である「21世紀新かごしま総合計画」にも同構想が主要プロジェクトに位置付けられています。

そして、'93年には構想を推進するため、鹿児島県、上屋久町、屋久町によって財団法人屋久島環境文化財団が設立されました。同財団では、総合的な



'93年3月にまとめられた「屋久島環境文化村マスタープラン」の報告書概要版

1 屋久杉  
樹齢1,000年以上の杉を屋久杉といい、1,000年未満のものを小杉と呼ぶ。

交流案内機能を持つ「屋久島環境文化村センター」と、環境学習の研修・宿泊施設である「屋久島環境文化研修センター」の環境学習中核施設の管理運営のほか、環境学習プログラムの企画立案や機関誌の発行、環境保全活動の普及・啓発などの事業を行っています。

### 屋久島におけるエコツーリズムの現状と課題

屋久島環境文化村構想では自然体験型観光「エコツアー」の開発について「屋久島でのエコツアーは、人々が生活のなかで自然を利活用してきた長い歴史を踏まえ、島の生活の成り立ちや空間を体験することによって、自然について深く学ぶとともに、人と自然の持続的な共存の在り方を学び、その過程を楽しむものです。こうした視点のもとにプログラムの開発、ガイドの養成、利用者の誘致を進め、新たな地域産業としての育成を図ります」と規定しています。屋久島の地域づくりは、生活、産業、文化などのあらゆる面で、特徴ある自然環境とのかかわりのなかで進められ、観光産業は最も将来性のある産業として、「自然体験型のエコツアーを中心に観光産業の発展を図ることが、自然環境の保護・保全が図

られるとともに、経済波及効果により他の産業の活性化にもつながる」との観点で、エコツーリズムの重要性が認識されています。

屋久島では、樹齢7,200年ともいわれる縄文杉を訪ねるトレッキングや標高800mの白谷川流域に広がる白谷雲水峡ハイキング、宮之浦岳登山など、ガイドとともに楽しむエコツアーが盛んです。エコツアーで最も重要な役目を果たすのが、インタープリター（自然解説者）となるガイドですが、現在屋久島でエコツアーガイドとして活動する人は100名ほどといわれています。世界遺産登録後、外からの移入者ガイドも増え、ツアーガイド料が10,000円のツアーも多くあり、ガイド業のみで生計を立てている人も少なくありません。しかし、さまざまなガイドがいることも事実で、ガイドの質や料金の違いなど、観光客からの苦情が寄せられるようになり、課題も見られるようになってきました。屋久島では、屋久島ガイド連絡協議会が設立されていますが、こうした問題を積極的に解決することも難しい状況にありました。また、観光協会内にガイドの登録制度はあるものの、2年以上の実績、2年以上の住民登録などの条件があり、ガイド紹介の機能が中心だったため、問題解決につながる動きは見られなかったようです。

さらに、観光客の要望や事業利益を重視するためか、屋久杉を見るツアーなどは「山の奥へ、奥へ」という傾向も見られるようになり、自然への負荷が心配されるようになっていました。

こうした状況を踏まえて、財団ではガイドセミナーの実施に加えて、'02年9月～'03年10月に島内の関係機関・団体が一堂に会した「エコツーリズム支援会議」を開催し、将来像の共通理解や課題の認識などに務め、昨年10月に「屋久島エコツーリズム推進のための指針及び提案等」を取りまとめています。ここでは、屋久島エコツーリズムの指針として、自



上屋久町にある「屋久島環境文化村センター」は屋久島に関する総合的な情報の提供、交流、案内の拠点施設。



上屋久町にある「屋久島環境文化研修センター」は、屋久島をフィールドとした環境学習のための宿泊研修施設。

然・文化・環境保全のための指針だけでなく、エコツーリズムは「地域づくりの役割があることを理解する」といった島民のための指針、さらに「自然や歴史、文化等について事前に学習する」という来島者のための指針も盛り込まれています。このなかには「屋久島エコツーリズムへの提案」(表1参照)として、エコツアー企画者からガイド、交通機関や宿泊施設、飲食提供施設などの観光業者のみならず、農業、漁業、林業、商工業、民間団体、行政機関など、さまざまな立場の人々に対する提案もまとめられました。

エコツーリズムとは、ある一部の人々のみがかかわるものでなく、地域全体、産業全体がかかわるものであり、地域の人々がいかにそれを受け止めて持続的なものとして定着させることができるのかが重要な鍵といえるのです。

財団が設置したエコツーリズム支援会議は環境省が設置した「屋久島エコツーリズム推進検討会」と共同開催されており、こうした屋久島での取り組みは、今後の日本のエコツーリズムにとっても貴重な経験であるといえます。

### ガイドの質を高めるために

先のエコツーリズム支援会議では、屋久島エコツアーガイドに求められる基礎知識を 自然環境に関する知識、 歴史、産業、伝統文化等に関する知識、 野外活動の技術、安全管理、法律、 顧客(来島者)とのコミュニケーション等の知識の四つに分類しています。屋久島のエコツアーガイドは、山岳、森歩き、沢登り、カヌー、ダイビングなど多様な上、



表1 屋久島エコツーリズムへの提案

#### 1.エコツアー企画者への提案

来島者への情報提供  
自然や歴史、文化に親しみ、環境保護につながる旅行の企画  
エコツアー利用地域の分散  
伝統文化や郷土芸能への体験、参加  
行政機関や環境学習関連施設、民間団体等との連携  
屋久島の産業育成と島民との交流促進  
来島者からの感想や意見収集・活用

#### 2.エコツアーガイドへの提案

自然、歴史・文化、安全管理などに対する基礎知識の理解促進  
自己研鑽・研修会等の活用による知識、技術、経験の向上、蓄積  
自然環境の利用状況調査、モニタリング及び自然保護や環境保全への協力  
来島者のニーズの把握と触れ合いの重視、感想や意見の収集・活用  
屋久島独自のエコツアー・プログラムの研究・開発  
諸々の地場産業と連携したエコツアー・プログラムの研究・開発  
屋久島独自のガイド登録・認定制度

#### 3.観光業への提案

自然に対する知識、文化や歴史に関する知識の理解促進  
来島者に対し、環境の保護・保全の重要性についての指導  
関係機関が開催する研修の積極的受講  
屋久島の食材を活かした郷土料理の研究、特産品の紹介・提供  
観光や環境学習に関する機関・団体との連携強化や情報の収集、発信  
屋久島の交通体系の在り方について研究  
宿泊関係者における屋久島らしさの追求、こだわり  
飲食店も独自メニューを作る

#### 4.農業、漁業、林業への提案

農業、漁業、林業への体験活動を受け入れる体制づくりの整備  
生産の喜びと、作物や自然の大切さの体験、その仕組みの整備  
生産物に付加価値を付けるための情報収集、研究開発  
生産物等の島内関連施設における販売促進  
生産物の島内消費拡大を図る。関係機関との連携強化  
農業関係者へ  
漁業関係者へ  
林業関係者へ

#### 5.商工業への提案

観光や環境学習に関する機関・団体との連携強化や情報の収集、発信  
特産品の研究・開発、紹介・提供  
生産や加工過程を見学、体験できる受け入れ体制の整備  
水力発電のエコツーリズムへの活用

#### 6.民間団体への提案

エコツーリズムに関する新しい取り組みを推進するための民間団体の連携強化  
伝統行事・伝統芸能など文化関係団体の活動内容の充実・活用  
観光や環境学習関連施設との連携強化や情報の収集、発信  
環境キップ制度や協力金制度のあり方等についての調査・研究  
屋久島観光の方向性の確立と、その中での屋久島独自のエコツーリズム実現の位置付け

#### 7.行政機関(国・県・町)への提案

屋久島観光の方向性の確立と、その中での屋久島独自のエコツーリズム実現の位置付け  
エコツーリズムに関する研修等  
行政機関が連携した自然観察会、環境学習等の充実  
自然環境や伝統文化の調査研究と情報提供  
地域社会の方向と学校教育のあり方  
環境きっぷ制度や協力金制度のあり方についての調査・研究

活動分野ごとに求められる専門知識も必要で、この点はガイド事業者による知識・技術・経験の蓄積が望まれます。

財団では、'96年から人材養成セミナーを開催してきましたが、昨年度からは救急法など専門的で本格的なガイドセミナーを始めています。また、植物や地学、歴史や民俗学などを学ぶ屋久島研究講座と題した講座も始まり、ガイドの質をより高める取り組みが始まっています。この講座には島内で活躍するガイドだけでなく、観光業者や学校の教職員も参加するなど、非常に好評で、今年度も継続されています。また、今後は、屋久島独自のガイド登録・認定制度が検討されることになっています。

#### 地域に根差したエコツーリズムに向けて

世界遺産への登録は、そこに住む人にとって、自然環境が守られるといったプラスの面ばかりではありません。観光客が増え、住民に対して自然環境保護への意識やごみ問題などにも厳しい目が注がれ、また、心ない観光客によって自然が破壊される恐れもあるのです。'89年度に17万人だった屋久島の入込客数は、'02年度に29万人になっており、例えば、コケで覆われていた推定樹齢<sup>2</sup>2,000年のウィルソン株などは、観光客が触るためにコケが少なくなってしまうという被害が出ています。

先述したように山の奥へ、奥へと観光客を連れていくツアーガイドもいます。屋久島では集落の代表が山に宿る神に詣でる岳参りという習慣があるのですが、代表として参るのは、たくさんの方が山に入れば自然が壊れてしまうという発想もあったといえます。こうした事態を憂慮して、昔から地元で活動するガイド集団のなかには、最も人気のある日帰り縄文杉ツアーを行っていないところもあります。片道5時間もひたすら歩くために費やすだけでは屋久島

の自然を深く理解してもらうことはできないという考え方です。

屋久島への移動手段は飛行機と船に限られているため、その便数などによって観光入込数に一定の枠ができることもあり、現在は登山者の入込制限などは行っていませんが、今年度から入山者が利用する山小屋、登山道、トイレ等の維持管理費などに充てるため、入山者から環境保全推進協力金を収受することを検討しています。また、奥へ奥へと進むエコツアーを見直し、自然破壊を防ぐためにも、海や川など多彩な屋久島の自然を楽しんでもらう「里のエコツアー」を推奨しています。屋久島を訪れる観光客は縄文杉や白谷雲水峡など、どうしても知名度の高い観光名所に集中しがちです。しかし、屋久島には多様な自然と風土があり、これを生かして、人間の生活文化の視点から見えてくる自然を提供する風土ツアーのようなものが考えられないかということです。

「屋久島の環境文化は、島内にある24の集落の人々が守ってきた自然のなかで受け継がれてきました。しかし、エコツアーで自然が荒らされる心配が生じるようになって、来島者と集落の人たちとがどのように共生するのが重要になってきています」と、屋久島環境文化村センターで事業課長を務める日高益雄さんはいいます。里のエコツアーも農業や林業など、地元の人との接点のなかから生まれ



屋久島環境文化村センターには、上屋久町から日高課長（写真左）のほか、鹿児島県から和田博秀さん（写真右）ほか4名、屋久町から1名が派遣されている。

<sup>2</sup> ウィルソン株

屋久島最大の杉である縄文杉を見学するトレッキングルートにある巨大な切り株。アメリカの植物学者、アーネスト・H・ウィルソンによって世界に紹介されたことからこの名前が付いた。豊田秀吉が京都方広寺の大仏殿の建立に当たり、島津義久に命じて伐採させたという説があるが、定かではない。

てくるツアーを目指しているのです。

財団では、環境についての住民の理解を深めるために、'97年に環境省や森林管理署、県、町、教育委員会、NPO法人などで構成する「屋久島環境学習ネットワーク会議」を設置しています。

これは島内にある環境学習関連施設の有機的な連携を図り、環境学習プログラムの提供や施設の利用促進、情報交換を行うためのものです。各構成団体が観察会やお祭り、講座、自然体験セミナーなど、さまざまな事業メニューを用意しており、相互に協力しながら、地域住民への環境教育を行っています。事業メニューは80種ほどもあり、地元の小中学生や高校生を対象にしたものも少なくありません。今年度は島内で唯一の屋久島高等学校の環境学習コースの生徒を対象にした2泊3日の「屋久島高校環境学習」事業も始まります。日高事業課長は、「これから先は、特に環境教育を取り入れた子どもの活動が必要になってくると思います。山や川、海を見てきれいだなと思う心を育てていかなければ駄目だと思います」と、地域が一体となったエコツーリズムを推進するためには、小さなころからの環境教育が重要であることを実感しているようです。

財団では、このほか地域住民の理解を深めるため、地元で発行している季刊誌『生命の島』で各集落の

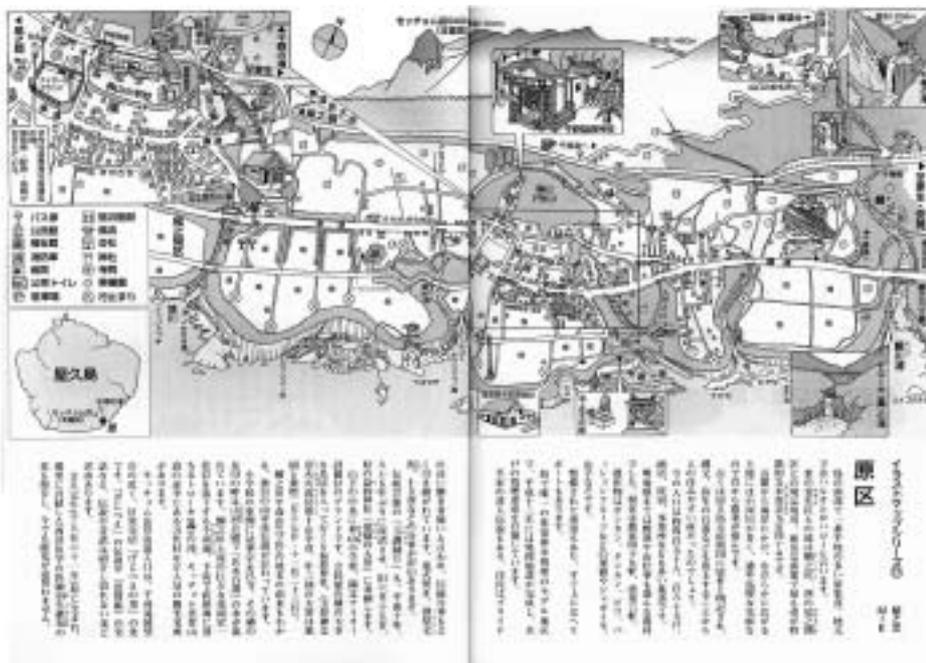
伝統文化などを紹介していたイラストマップの冊子を作成するなど、地域と共生するエコツーリズムを目指して、まずは地域住民の理解、参加を促す取り組みを進めています。

「エコツアーはボランティアでは成り立ちません。最終目的は地元にいる人たちが豊かに暮らすことです」と、エコツーリズムはガイドなど一部の観光業者だけががかわるものでないことを日高課長は指摘します。

地域が一体となってどのようにエコツーリズムを受け止めていくのか。また、その恩恵を多くの人々が実感できるには、どのような取り組み、仕組みが必要なのか。一方で、エコツーリストが増えることで、自然破壊の危険性が高まることも事実です。

屋久島へは移動手段が限られることもあって、観光客の平均宿泊数は2.8泊となっており、島内での消費は5万円以上、ガイドを伴う活動では、この活動に一人当たり13,000～16,000円と、消費単価も高くなっています。そういったこともあって、国内ではガイド業がしっかりと根付いている数少ない地域でもあります。

屋久島の経験から何を学ぶことができるのか。地域との共生という言葉に、これからのエコツーリズムの鍵があることを教えてください。



地元季刊誌『生命の島』に集落ごとに掲載されたイラストマップの一例。



## 地域と連携する自然体験型の 観光地を目指して

～自然体験型事業の先駆け、美瑛・富良野エリアの経験から～

富良野市を中心に広がる美瑛・富良野地域は、丘陵地やラベンダーなど景観を楽しむ観光に加えて、空知川やかなやま湖、滝里湖などがあり、早くからラフティングやカヌー、熱気球など、アクティブな自然体験メニューを提供している観光地です。アウトドアメニューを提供する団体は、富良野市・美瑛町・上富良野町・中富良野町・南富良野町・占冠村で20ほどあり、団体間の連携も見られます。

この地域で活動する美瑛・白金ネイチャークラブ代表で、NPO法人グリーンステージ理事長も務める小倉博昭さんと、NPO法人どんこ野外学校の目黒義重代表に、これまでの活動についてお聞きしました。



## アルパイン計画から美瑛・白金ネイチャークラブへ

富良野を全国に認知させる大きなきっかけとなったテレビドラマ『北の国から』。1981年に放送が開始され、5年後の'86年にアウトドア体験活動を提供する「アルパイン計画」が設立されました。アルパイン計画は、『北の国から』の脚本家である倉本聰氏から、オーストラリアで行われている自然を生かしたアウトドア体験サービス事業のことを聞いた地元の青年会議所のメンバーによって設立された有限会社です。'90年に然別湖畔に然別湖ネイチャーセンター（現在は「株式会社北海道ネイチャーセンター」）が法人化されていますが、当時、道内で自然体験活動を提供する企業はほとんど見られず、日本国内でも先駆的な事業化でした。

アルパイン計画の事業が大きく展開されるようになったきっかけは、'92年に全日空系列の旅行代理店がアウトドアに着目し、共同でツアーがスタートしたことです。全日空のロゴ入りの熱気球など機材の委託管理を行い、大変なヒット商品になりました。ある程度の個人客のベースができ、修学旅行などの団体ツアーの話が持ちかけられ、新たな人材を確保する時期に東京出身の小倉さんはアルパイン計画に入社します。今から10年ほど前のことです。

アルパイン計画では、同社内にオリジナルツアー企画を担うアルパイントラベル（'95年有限会社）を'87年に設立。'96年には手作りソーセージやクラフトなどのインドア体験サービスと団体向け営業窓口となる有限会社コロポックルを設立し、'98年には宿泊施設に近い北の峰地区の旧北の峰ホワイトユースホステルを購入してツアー予約や観光案内、宿泊機能も兼ねたアルパインビジターセンターを設置、翌

年に広域エリアのアウトドア事業者ネットワークとして「富良野ネイチャークラブ」を立ち上げます。

小倉さんは、'02年に大雪山国立公園内の美瑛・白金地区のガイド事業を中心に行う有限会社ネイチャークラブを設立し、「美瑛・白金ネイチャークラブ」として、白金温泉を拠点に活動しています。美瑛・白金ネイチャークラブでは、農家を訪ねて収穫体験ができるネイチャリングエコツアーをはじめフォレストウォークや熱気球、レイクカヌーのほか、気軽に参加できる散策などのメニューを提供しています。

アクティブな活動は富良野市に本社を置くアルパイン計画を中心に、エコツーリズムを目指す自然体験部門は美瑛・白金ネイチャークラブが国立公園のある美瑛・白金地区を中心に展開する方向ですみ分けしているのです。

## 緩やかなネットワークを生かす

ネットワーク機能である「富良野ネイチャークラブ」では、一般客の予約を一つの窓口でまとめるほか、1団体が対応可能な客数を超える場合の業者間での連携やメニューパンフレット作成を行うほか、繁忙期と閑散期のスタッフ連携なども行っています。

美瑛・富良野エリアでは、修学旅行生の受け入れが盛んで、多い年には200校ほどの受け入れがありました。修学旅行の受け入れが円滑にできたのは、こうした予約の集中化と情報管理があったからではないかといいます。また、厳しい価格競争も抑制されたという面があります。

その一方で、今ではガイド業者が増え、修学旅行では希望する体験メニューがラフティングに集中する事態になっています。ラフティングの体験場所



ツアー予約や問い合わせのほか、情報提供、宿泊ロッジも兼ね備えたアルパインビジターセンター。



美瑛・白金ネイチャークラブは白金温泉の白金観光センターすぐそば。ホームページは<http://www.nature-club.jp>、問い合わせは0166-94-3555。

ある空知川への影響や、どこを見ても人ばかりという、本来の自然のなかで楽しむ魅力が半減されてしまうという課題が見られるようになってきているのです。ガイドのなかにはヤマセミが見られなくなったなど、実感として自然への影響を感じる人もいるものの、それを証明する基礎データもなく、具体的な対策はなされていません。しかし一方で、修学旅行生の受け入れによってスタッフを通年に近い形で雇用できる側面があることも事実なのです。

ガイド業は社会的な認知がまだ十分でなく、冬期は夏期の10分の1程度の稼働と、季節変動が大きく、国土交通省北海道局が平成14年度に行った『自然体験活動・貴重な自然資源の活用等を通じた地域活性化方策調査』では、ガイドのモデル年収は幹部クラスで350万円、新入社員で200万円程度となっており、半年のアルバイトの場合は初年度で80万円程度、3年目でも130万円程度と、待遇面では魅力あるものとはいえない状況で、年収500～600万円といわれる屋久島のガイドとは程遠い状況にあります。また、時間内で仕事をこなすだけでスキルアップできるものでなく、専門知識の蓄積や経験、どんな状況でも対応できるような日々の努力が必要な仕事でもあります。経営基盤のぜい弱なアウトドア事業者にとってみれば、経営面はもちろん、ガイドのスキルアップにもこうしたネットワークは有効なものになります。

小倉さんが別会社を設立した背景にも、ガイドのような仕事は、会社員として働くのではなく、自分の生活は自らで稼いでやっていくくらいの気持ちが必要ではないかという思いがあったからです。数年間は雇用される形で経験を積む期間があっても、その後はのれん分けし、個々の事業者が緩やかなネットワークでつながっていくことで、客の分散化が

図られ、環境への負荷も減らすことができるのではないかと考えているのです。

量から質のエコツーリズムを目指して

小倉さんが富良野市にあるアルパイン計画の事務所ではなく美瑛町白金温泉にあえて会社を設立したのは、もう一つ理由がありました。富良野が本拠地となれば、活動エリアである美瑛・白金地区の住民や行政側はどうしても他のまちの一事務所というとならえ方になってしまい、地域で盛り上げる機運にはならないのではないかと考えていたからです。地域に根差して展開していくためにも美瑛町にある会社にしたかったのだといいます。

美瑛・富良野エリアでは'01年度に680万人弱の入込数があるものの、その8割が日帰り客で、通過型の観光地です。地元では入込数を増やす集客発想がまだまだ根強く、滞在型で域内消費をうながすような量から質への発想転換にはつながっていないようです。

そのような状況のなか、今後小倉さんが目指す一つの方向にエコツーリズムがあります。農業の収穫体験や地元産食材を使ったスローフードを提供する店への案内など、地域産業と一体となったエコツーリズムを根付かせていきたいと考えています。

そして、十勝岳連峰南側の広域エリアを対象として、「エコツーリズム」と「サステナブル(持続的な)」をキーワードにした「NPO法人グリーンステージ」が設立されたのです。グリーンステージでは滞在型観光の促進活動や人材育成事業、自然環境の保全活動、地域振興活動などを行っており、エコツーリズムの普及啓蒙やコーディネート機能を担っています。理事にはエリア内で活動する自然ガイドや宿泊業、山岳会や農家、会社員などが名を連ね、新しいネットワークが生まれています。



ツリークライミングはコラムニストでツリークライマーであるジョン・ギャスライト氏によって国内に知られるようになり、同氏が理事長を務めるNPO法人ツリークライミングジャパンが設立されている。

「ツリークライミングは植樹体験などを組み合わせることで相乗効果も期待できる」と小倉さん。



グリーンステージでは新しいメニューの普及や講習会などの開催を計画していますが、今後、積極的に取り組んでいこうとしているのが、ツリークライミングです。高さ10m近いところにある木の枝にロープを渡して登っていくもので、初心者でも簡単に登ることができ、木の上から今までとは違った視点で森の眺めを楽しめるというもので、美瑛・白金ネイチャークラブで既に提供しているメニューです。

農業では収穫体験など分かりやすいメニューがいろいろ考えられますが、林業の場合、植樹などは実感するのに時間がかかります。木に触れる、登ることで興味を持ってもらうことができる上、北海道向きで、かつ、冬の目玉メニューになる可能性を秘めています。今後、グリーンステージでは小倉さんを含めて道内で3名しかいない公認ファシリテーター養成のための講習などを企画し、新しいツアーメニューの一つとなるよう積極的に取り組んでいきたいと考えています。

「北国の特徴を生かして、冬の寒さときれいな雪を実感してもらうことが北海道の目玉。最終的にそこにたどり着くことができればと思っています。また、グリーンステージではガイドのスキルアップにつながる勉強会などもできれば」と小倉さん。10年の経験を経て、次のステップを踏み出しています。



目黒さんが最初に手がけた研修棟は手作り。



#### 公認ファシリテーター

アメリカに本部を置くツリークライミング愛好家たちの世界的なネットワークであるツリークライマーズインターナショナル(TCI)の日本支部「ツリークライミングジャパン」によって認定される資格。安全で基本的な広葉樹向けクライミング方法を認められる「ベーシックツリークライマー」。その資格を取得した者で針葉樹向けのテクニックをマスターする「ツリークライマー」を経て、多くのイベント経験を積んで、ジョン・ギャスライト氏によって認められたクライマーに与えられる資格が公認のファシリテーターである。この資格を取得することで、一般人を対象としたツリークライミングイベントを開催することができる。

#### 野外活動の指導者養成を目指すどんころ野外学校

'89年に南富良野町に設立された「どんころ野外学校」は、植村直己・帯広野外学校設立当初にボランティアでかかわった目黒さんが立ち上げた野外活動の指導者養成を目的とした野外学校です。今から20年ほど前、通年で活動できる野外学校設立を目指し、知床や大雪山周辺で候補地を探したところ、近隣町村がリゾートブームに沸いていたなかで、南富良野町が前向きな対応を示してくれたことや閉鎖された町有牧場の跡地があったことから、南富良野町落合に本拠地を構え、自身の手で研修棟やキャンプ場などを整備し、現在に至っています。

当初は野外活動指導者に対する社会的な認知も低く、養成コースへの申し込みはほとんどなかったといいます。そこで、教育大学を中心に教育実習のような形で、子どもを対象にしたキャンプを受け入れたところ、キャンプ活動のなかで子どもに自然体験をさせるメニューとして川遊びや自然探索などが取り入れられ、アウトドアブームに乗って、今ではラフティングやカヌー、カヤックやハイキング、冬にはネイチャースキーや犬ぞりツアーなど、一般客の受け入れが事業の中心を占めるようになったのです。

これまでは活動に見合った適当な法人形態が見当たらなかったため任意団体として活動してきましたが、昨年NPO法人として認証されました。

どんころ野外学校はもともと指導者養成を目指していたことから、利益のみにこだわらず、丁寧な対応をしてくれるため、お客さんの7、8割はリピーターで、新規客でも口コミによるものが多いといいます。また、口コミ以外の情報源はホームページが多く、当初は道外客中心だったのが、今では道内客も4割程度になったといいます。道内客もアウトドア活動にお金を使う基盤が徐々にできているようです。



キャンプ場にある炊事棟。複数の団体からキャンプ予約が入るため、敷地内に二つのキャンプ場がある。



どんころ野外学校への問い合わせは0167-53-2171。ホームページは<http://www1.ocn.ne.jp/~donkoro/>。

## 地域との結び付きをいかに図るか

当初は町内にどころ野外学校しかなかった自然体験活動を受け入れる団体もアウトドアブームとともに増え、どころ野外学校を含めて現在は4団体となっています。南富良野町でも修学旅行の受け入れが盛んで、去年は町内の業者で「南富良野ネイチャーセンター」を設立し、こうした団体に共同で対応できる体制を整えています。また、地元の南富良野高校が北海道アウトドア資格制度人材育成機関の正式認定を受けるなど、町内での連携や理解が深まりつつあります。

しかし、昔から暮らしている地元住民にとっては、これまであまり聞いたこともないような業種で、とまどいがあることも事実。地域とのコミュニケーションがない団体など、地元とのあつれきが生まれていることも否めません。地域との連携をいかに図っていくかが一つの課題ともいえます。

今後、目黒さんは当初の設立目的である指導者養成だけでなく、農業や林業など一次産業にかかわる分野についても積極的に取り組んでいきたいと考えています。敷地内では既に豚の養育や農作物の生産を手がけており、町内北落合や中富良野町には提携農家もあるといいます。農業体験や植樹のニーズもあり、提携農家での農業体験や記念植樹は既に行っています。

「カヌーやラフティングは華やかで収益も上がりますが、それほど長く続くものではないと思っています。決してカヌーやラフティングを軽んじるわけではないのですが、農業や林業関係、あるいは建築や工芸など、生産的な分野も充実させて、生産活動もできるようになれば」と将来を見据えます。エコツーリズムの視点を生かした展開が、地域との連携を図る一つの鍵になるように感じます。

## 地域内のネットワークが鍵に

アウトドアブームや修学旅行生の受け入れで、美瑛・富良野エリアには多くの自然体験型事業団体がありますが、既にご紹介したように各地域で団体間のネットワークができています。また、ラフティングやカヌーなど川にかかわるメニューを提供する団体が多いことから、統一のローカルガイドルールやレスキュー体制の確立など、川にかかわる安全管理面でのネットワーク組織として「空知川会連絡協議会」が立ち上がっています。

北海道では、アウトドア活動分野の人材育成を目指して「北海道アウトドア資格制度」が整備されていますが、今後の運用によっては形骸化してしまうのではないかと懸念があります。画一的な資格制度によって、地域の特性を生かしたメニューや資格を持っていなくても地域情報に詳しい宿のオーナーなど、優秀な人材を埋もれさせてしまう可能性も否めません。しかし、美瑛・富良野エリアのような地域内でのネットワークがあることで、こうした課題を解決する糸口が見つかるのではないのでしょうか。

自然体験活動を提供する事業は、個々の企業活動としては弱い側面もありますが、美瑛・富良野エリアでの経験からはネットワークが一つのキーワードとして浮かび上がってきます。事業者間の連携によって地域の安定した産業への展開が可能になると思われます。今後は地域と連携した取り組みやツアー開発のほか、収益の上がる修学旅行などの団体受け入れと、エコツアー的な要素をうまく組み合わせ、自然に配慮し、自然と親しむ体験型観光地としての発展が望まれます。



高校時代から山登りを始め、当初は山のガイドを目指していたという目黒さん。

# ブナ北限の里づくりとNPOによる エコツーリズムの推進

～黒松内のまちづくりとぶなの森自然学校～



エコツーリズムという言葉が知られるようになる前から、地域の自然環境、農業や農村風景、地域文化を潜在的な資源として位置付け、都市との交流を促進する体験型・滞在型のまちづくりを進めていたのが黒松内町です。同町には、ブナ・ウォッチングをはじめとする野外体験活動を行うブナセンターのほか、5年前に北海道自然体験学校を主宰するNPO法人ねおすの協力によって、交流と教育をキーワードにした黒松内ぶなの森自然学校が開校しています。ブナ北限の里である黒松内町を訪ねてみました。



## ブナ北限の里づくり構想によるまちづくり

黒松内町は人口約3,500人、道南の渡島半島の内陸部に位置し、日本海と太平洋への直線距離はともに20数km、札幌市と函館市の中間点にあります。

黒松内町にある歌オブナ林は、1928年に北限のブナ自生地を代表するブナ林として天然記念物に指定されています。ブナは日本の落葉広葉樹林帯を代表する樹種で、かつて東日本一帯はブナ林で覆われていました。そして、人間は山菜やキノコや狩猟などブナの森の恵みを受けてきたのです。しかし、高度経済成長期に、木材としての価値が低かったブナはどんどん伐採され、ブナの自然林は残り少なくなっています。黒松内でも太平洋戦争末期に木製戦闘機のプロペラ材用に一部が伐採されそうになったり、戦後も町の財政事情から天然記念物を解除しようと

いう危機があったものの、学術的な価値を知る学者や地元住民の熱心な運動によって、今も原始的な姿が残され、葉の面積が大きい、幹がまっすぐで下枝が少ないなど、北限としての特徴あるブナが残っています。

全国各地でまちづくりという言葉が盛んにいわれるようになったころ、黒松内町でもさまざまな立場の人々が集まり、21世紀のまちづくりを検討しようと、'87年にまちづくり推進委員会が設置され、この委員会から「ブナ北限の里づくり構想」が提唱されます。この構想は、黒松内にある優れた自然環境やここで営まれている農業や農村風景、地域文化を潜在的な資源として位置付け、町民が誇りとする農村風景の創造と、都市との交流を促進するふるさとづくりを目指そうというもので、'89年に本格的にスタートしました。

この構想を推進する拠点施設として、'91年には自然体験学習施設「歌才自然の家」が、'93年に町内の自然と歴史などの地域情報を発信する博物館「ブナセンター」と、オートキャンプ場「ル・ピック」、特産品加工手作りセンター「トワ・ヴェール」がオープン。5年前には展示販売施設の「トワ・ヴェール（ドゥー）」と、構想に沿ったユニークな交流複合施設が整備されてきました。なかでもブナセンターは、初夏と冬に行われる「ブナ・ウォッチング」のほか、森のウォーキングや子どもを対象にした野外活動など、エコツアーの先駆けともいえる事業を行ってきました。今も年間延べ2万人ほどが訪れ、小学校の総合学習などにも対応しています。

黒松内町は、北限のブナ林が象徴するように、本州型と北海道型の自然の境界地であり、両者の自然環境を身近に見ることができます。また、低地の高層湿原であり、道内で最も形成年代の古い歌才湿原や瀬棚層の化石群など、研究者にとっても興味のある

#### 瀬棚層

道南の瀬棚～今金付近をはじめ、黒松内～函館の低地帯に分布する地層。主にれき岩、砂岩、シルト岩からなり、固結度の低い典型的な堆積軟岩。



黒松内ぶなの森自然学校のそばにある研修所は(財)宝くじ協会の助成で建設。



資源があり、自然関連の研究者も多く訪れています。町内にある宿泊研修が可能な研究者用住宅を拠点に長期で滞在する研究者もいるといえます。

構想がスタートして、徐々に交流人口が増え、また、数は少ないものの黒松内町に移り住む人も見られています。

### 黒松内ぶなの森自然学校の開校

札幌に本部を置く「NPO法人ねおす」の理事長で、'99年に開校した「黒松内ぶなの森自然学校」代表の高木晴光さんもその一人です。

ねおすは、専門学校形態の社会教育事業を行っていた社会総合研究所に勤務していた高木さんが、同所の関連事業として「北海道自然体験学校NEOS」を設立し、その後、独立した組織で、NPO法施行と同時にNPOの申請を行い、現在は自然学校やネイチャーセンターの運営受託や人材派遣、子どもから大人までの自然体験活動の企画、実施、エコツアープログラムの企画実施、自然活動や環境教育にかかわる人材育成など、自然と人だけでなく、広くまちづくりや地域づくりを意識した活動を行っています。

ねおすと黒松内とのかかわりは、今から7年ほど前。スタッフの一人が子どもたちを対象としたツアーでこのまちを訪れたことでした。当時、既に黒松内での取り組みは知られており、複数の人から「おもしろいまちがある」と聞いたといえます。その後、ガイド養成の一環として実習地の黒松内を訪れるよ



黒松内ぶなの森自然学校は廃校した小学校を利用した生涯学習館を再利用。問い合わせは0136-77-2012、ホームページは[http://www.d2.dion.ne.jp/buna\\_ns/](http://www.d2.dion.ne.jp/buna_ns/)。

うになり、ブナセンターのフロント業務にもかかわったことで、少しずつ関係が深まってきました。

そして、'99年に環境省、黒松内町、(社)日本環境教育フォーラム、NPO法人ねおすの支援によって黒松内町南作開の生涯学習館(元作開小学校)を拠点に「黒松内ぶなの森自然学校」が開校します。自然体験活動を推進する全国の団体とネットワークがあった高木さんのもとへ、環境省と自治省が進める「自然体験型環境学習拠点(ふるさと自然塾)事業」の北海道の候補地について打診があったのです。いくつかがかわりがあったまちに声をかけたところ、黒松内町が前向きな姿勢を示し、4カ年のモデル事業地区に選ばれ、モデル事業終了後の現在もねおす为中心となって運営されています。

ぶなの森自然学校では、子どもを対象とした長期自然体験学校や山村留学のほか、エコツアーの実施や研修事業を行っています。ねおすではここをOJT(on the job training)の場として位置付け、現在は研修生3名を含めた7名のスタッフが常駐しています。拠点である生涯学習館は、廃校を利用したこともあって、町営の宿泊施設などからやや距離がありますが、学校そばには宿泊機能を兼ねた研修所も建設され、宿泊を伴った野外体験活動も積極的に受け入れています。

本部が札幌にあるNPO法人ねおすの代表でもある高木さんが黒松内に移住したのは4年前。「ここに初めて来た時から居心地がいい地域だと感じていて、われわれも人材育成の実習地を探している時でした。タイミングがよかったこともあります。今思うと、ここには酪農を中心とする農業、近隣には水産業もあり、特徴ある自然もあります。研修所は第一種農地を転用したのですが、地元の農業委員会も非常に協力的で、そういった基盤と環境があったように思います」と黒松内の魅力を語ります。

## 地域とともに進めるエコツアーのために

ぶなの森自然学校には「どんなことができるか」「宿泊はできるのか」「料金は」など、直接問い合わせが寄せられます。今では札幌圏だけでなく、近隣町村からの参加者も見られています。

ぶなの森自然学校のエコツアーは、歌オブナ林のガイドだけでなく、町内を流れる朱太川でのカヌーや貝化石の採集、個人の所有地から黒松内のまちを眺めたり、ツアー参加者限定で地元の食材を生かして地元レストランのシェフが作った特製弁当が注文できるなど、地域にこだわった体験メニューがそろっています。「異次元を作り出すのではなく、暮らしに連動したツーリズムでありたい」と高木さん。「地域と共に」というキーワードを大切に、「交流」と「教育」に視点を置いたエコツーリズムを実践する場がぶなの森自然学校といえます。

一方で、大量の人を受け入れるマスツーリズムとは違って、エコツーリズムを推進していくためには、発地主義の観光ではなく、地元にお金が落ちる着地主義の仕組みを検討しなければならないといえます。例えば、グリーンツーリズムではファームインなど、規制緩和が進んだのに対し、エコツーリズムの場合はまだまださまざまなハードルがあります。

ねおすでは、同法人が運営する自然体験学校と道内でエコツアーを実施する団体とともに、オーダーメイドのエコツアーができる「エコツアーシステム北海道」という個人事務所を支援する体制を整えています。「地域のサイズに合わせた特徴あるものを発信するには、その地域から発信していかなければなりません。旅行代理店が募集する大人数のツアーではなく、5、6人でも催行できるようなもので地域のためになることを考えていくことがエコツーリズムではないかと思うのです」と高木さん。ねおすの存



黒松内町のほか、東川町、弟子屈町、登別市などにもねおすのスタッフが常駐している。「エコツーリズムは地域づくりにかなり近いもの」と高木さんはいう。

在は、組織ではなくネットワークと考えてほしいといえます。「自然といっても植物や動物、子どもと大人など、興味の対象は非常に広い。自然体験活動にかかわる人がモチベーションを維持しながら仕事を組み立てていくときに支えあって進めていく共同プロジェクトを『ねおす』と呼ぼうと考えているのです。」

地域に密着したエコツーリズムを展開するには、従来の概念を取り払って、新しい視点で考えていくことが重要であることを感じさせます。

#### これまでの歴史を生かしたまちづくりを

ふるさと自然塾モデル事業の間は、ブナセンターが持っている地域情報をぶなの森自然学校に提供するなど、ブナセンターと自然学校は兄弟的な存在でしたが、現在は活動分野や参加対象者が徐々に分離し、それぞれの持ち味を生かした活動を継続しています。

ブナセンターは博物館活動の一環として小中高校を対象とした授業や総合学習の受け入れ、各種研修の企画、実施、大学教官や学生を対象にした調査研究の補助、自然ガイドの指導などを行い、これらの窓口として学校教育部が設置されています。小中学校などの「教育」としての自然体験環境プログラムなどは、博物館の公的使命であり、他自治体からの依頼も区別せずに可能な限り協力しています。

一方で、黒松内町が環境とともに力を入れている福祉の面で、養護施設を対象にした事業をぶなの森自然学校で運営するなど、行政の手の届かない分野をアウトソーシングする機関としてぶなの森自然学校は機能しています。また、各省庁のモデル事業など、ねおす側が積極的に情報を収集し、行政と連携して申請を行い、自然学校の事業として組み込んでいくケースもあります。

ブナ北限の里づくり構想には、エコツーリズムという言葉はありませんでしたが、この構想にはエコツーリズムの考え方が根底にあったといえます。ブナセンターの高橋興世センター長は「今でもブナ・ウォッチングなどをエコツアーとは呼んでいませんが、今になって考えるとこれまでの取り組みはエコツーリズムという言葉に当てはまるのかもしれませんが、リゾート運営とは違うので劇的ではありませんが、交流人口が増えることで、町内で消費をして、少しでも経済効果が上がる。でも、その程度でもいいのです。それを長く続けていくことで、地域の活性化に少しでもつながる。高木さんもその一人ですが、本当にファンになってくれた人が移住してきたケースもあります。これも一つの効果だと思います」といいます。

ブナ北限の里づくり構想を指針にした黒松内での取り組みは、大掛かりなリゾート投資や派手な集客施設を伴うことなく、地道に地元の資源を活用しながら安定的な地域発展に結び付けていこうというもので、自然保護意識の高まりのなか、エコツーリズムの推進や環境教育を進めていく上で他の地域も学ぶべき貴重な経験だといえます（政府の食料・農業・農村政策推進本部の「立ち上がる農山漁村」の全国30モデルにも選定）

地域の資源を見つめ直し、背伸びをせずに地道にまちづくり構想を進めてきた黒松内町ですが、'06年3月を目途に、支庁を超えて長万部町との合併が議論されています。地道に進めてきたまちづくりの指針が大きく転換されてしまわないか、懸念する声もありますが、これまでの歴史を踏まえ、ブナ北限の里づくり構想を生かし、その延長線上にあるまちづくりを目指してほしいと思います。



図書館や工房もあるブナセンター。

中米のコスタリカは、エコツーリズムの先進地として知られ、徹底した自然保護政策を貫きながら、今や観光産業が最大の外貨獲得産業に成長しています。さまざまな法制度のほか、質の高いガイドの存在などが知られるコスタリカのエコツーリズムについて調べてみました。

# コスタリカのエコツーリズム

～エコツーリズムによる持続可能な発展～

## レポート Report



### コスタリカの自然と自然保護法

コスタリカは、太平洋とカリブ海に挟まれた自然の美しい小国で、面積は約5万km<sup>2</sup>、人口は約390万人、ちょうど北海道を一回り小さくしたような地域です。国土の約3分の1が3,000m級の高山とその山間に開かれた高原盆地からなっており、首都のサン・ホセは標高1,200mにある気候がさわやかな高山都市です。

コスタリカは、1949年に憲法を改正し、永久非武装宣言をするとともに、それまでの軍事費を人づくりのための教育費に転換し、'00年の国家財政に占める教育費の割合が20%を超えている教育立国でもあります。さらに、世界で最も生物的に豊かな国でもあり、鳥類、植物、蝶類、蘭など、面積当たりでは世界で最も多様な生物が生息しており、全生物種の5%、蝶類は10%が生息しているといわれています。

コスタリカでは'70年代以降、国立公園や自然保護区が次々と指定され、今ではこれらの指定地域が国土の約27%を占めています。'01年の段階で161カ所の国立公



園、生物種保護区、森林保護区などがあり、実に国土の4分の1が国によって保護の網がかけられていることになります。

コスタリカでは'93年に野生生物の保護をうたった野生生物基本法が制定されており、'94年には憲法を改正、「すべての人は健康的でエコロジ的に均衡の取れた環境に対する権利を持つ」こと、「国家はかかる権利を保障し、擁護し、保護する」ことがうたわれました。さらに、'95年には環境に対する国家の義務が詳細に決められた環境基本法が制定され、'96年には森林法を改正、森の木を伐採する際には細かな条件を付け、むやみに森林開発ができないようになりました。森林法の改正は、多くの国の森林法が林業との兼ね合いのもとで作られているなかで、概念を転換した画期的なものでした。そして、同年、自然保護法制の総仕上げとして生物多様性法が制定されます。このような法律は世界でも類を見ない先進的なものでした。

生物多様性法では、動植物、水や空気などの自然資源は「公に属する」と規定され、私企業の利益のために自然を開発することは厳しく制限されています。また、平和、民主主義、人権尊重、経済発展などの価値と環境保護を統合的にとらえ、「多様性」という言葉はそれらをすべて含んだものとして定義され、生物多様性という言葉に人間を含んだ地球規模の統合的価値感を内包しているものといえます。

#### 一次産品輸出からハイテクとエコツーリズムへ

コスタリカの経済は、伝統的にバナナやコーヒーを中心とする一次産品の輸出によって支えられてきました。'90年になるとフリーゾーン制度に関する法令が施行され、免税優遇措置が導入されたことで、外国企業のハイテク産業が立地するようになります。'98年に操業を開始したインテル社のマイクロプロセッサ製造工場は'99年に総輸出総額の38%を占めるほどになり、その後の米国経済の回復の遅れやITの低迷などで'02年には17%ほ

どに後退したものの、今でも最大の輸出品目となっています。

外貨獲得の面で、ハイテク産業とともに注目を集めているのが観光産業です。もともとコスタリカは、他の中米諸国のようにマヤ文明等の歴史的遺産がほとんどなかったため、文化的な観光資源に乏しい国でしたが、生物多様性や自然の美しさを国の資源として有効に活用しながら、次第に観光産業を自立的な産業に育てていくことに成功したのです。最近では開発と自然保護の調和を図りながら、安定した観光政策を進めていくエコツーリズムのモデル地域として評価されるようになってきました。

コスタリカの観光産業は、'93年にはそれまで最大であったバナナ輸出を抜いて、外貨獲得高でトップの産業となりました。現在は観光産業がGDPの8.7%を占めているといわれ、国の主要産業になっています。'90年代には中米諸国全体の観光客が堅調に増加しているなか、コスタリカの伸長は目覚ましいものがあり、'90年で約40万人だった観光客が'00年には110万人近くにまで増加。中米全体の観光収入2,800万US\$の約4割がコスタリカで、'90年に観光収入のトップであったガテマラを抜き、今ではコスタリカがガテマラの1.5倍の観光客を受け入れる国に成長しています。

#### モンテベルデのエコツーリズム

コスタリカのエコツアーは、バックパッカーからバカンスを楽しむ富裕層まで幅広く、北米やヨーロッパなどでは以前から知られていました。エコツアーのフィールドとして特に有名なのは、自然保護の原点で、熱帯生態系の保全と地域の振興に古くから取り組んできたモンテベルデです。

モンテベルデは日本でいう郡の単位の地域の名称で、首都サン・ホセから車で3時間半ほどのところにあります。モンテベルデの歴史は、'51年にアメリカでの徴兵を拒否したクエーカー教徒が非武装国・コスタリカのこの地に定住したことから始まります。彼らは所有した土

地の3分の1を開発せずに保護していく方針を採り、それがモンテベルデの基礎になったのです。また、彼らは酪農を中心とした農業を定着させ、現在はこの地域の中心地であるサンタ・エレナのチーズ工場で良質なチーズが製造されています。

モンテベルデの魅力は、熱帯雲霧林という独特の高山系の生態系が原始のまま残されており、多種多様な動物が生息していることです。特に傑出しているのは鳥類で、さまざまな種類の可憐なハミング・バードや、手塚治虫の『火の鳥』のモデルにもなった世界で最も美しい鳥といわれるケツァールが見られることで知られており、モンテベルデは野鳥愛好家にとってはあこがれの地です。また、太平洋の貿易風がアトランティック・ディバイドと呼ばれる太平洋地帯と大西洋地帯の境にある山岳地帯にぶつかり、その湿った空気が低地では雨に、高地では雲と霧になり、生物にやさしい独特の環境を作り出しているのです。



モンテベルデ自然保護区の入り口。



吊り橋の上から自然を観察するスカイウォーク。

モンテベルデ一帯は熱帯の密林で、起伏が激しい地形ですが、保護区内に整備されたトレイル（小道）に沿って、安全に散策することができるようになっており、「ネイチャートレイル」と呼ばれるガイド付きツアーは定番のエコツアーです。また、「スカイウォーク」と名付けられた高さ30mを越す吊り橋を渡りながら樹上の生態系を観察するツアーは最も人気があり、最近では地上30mの高さのジャングルの樹上に張られたケーブルを滑車で渡り、林間の自然を観察する「スカイトレック」も人気を集めています。スカイトレックで使われている滑車は、もともと研究者が使っていた移動道具で、既存のものを有効活用したエコツアーであることも一つの特徴といえるでしょう。

モンテベルデ地域にある最も有名な「モンテベルデ自然保護区」は、国立公園ではなく、民間団体によって管理運営されている自然保護区です。クエーカー教徒によって守られてきた自然が、その後、熱帯科学研究所に移管され、寄付や保護区の入場料によって運営されています。自然保護区のため、一度に入ることができる観光客数も制限されており、生物研究や自然保護教育の場としても貴重な地域でもあります。

また、同じ地域内には、モンテベルデ自然保護区から7キロほど離れた高地にある「サンタ・エレナ自然保護区」があります。ここは、コスタリカで初めて地域のコミュニティによって管理運営されることになった自然保護区で、管理運営が地元のモンテベルデ高校との連携によって行われているという特徴があります。運営収益は地域の環境教育、生物学教育、観光教育に振り向けられ、一方で保護区内の活動は高校生の教育活動とボランティアによって支えられているのです。

このほかにも、ウミガメの産卵や数々の熱帯動植物が観察できるトルトゥゲーロ国立公園、夜になると活火山から流れ出る溶岩が観察できるアナレル火山国立公園など、多様性のある動植物に加えて、火山性の地形、熱帯雨林、美しい海洋やビーチなど、コスタリカ国内にはさまざまなエコツアーのフィールドがあります。



サンタ・エレナ自然保護区のパンフレットには地元高校との連携についても紹介されている。

## 質の高いガイドと、地域と溶け込むエコツーリズム

モンテベルデ自然保護区には約30人の選任ガイドが活動しており、何種類もあるコースのなかから希望に沿ったツアーを選ぶことができます。個人で散策することも可能ですが、やはり醍醐味はガイド付きのエコツアー。植物や生物について詳しい解説を聞くと、貴重な動植物の理解が深まり、その価値を知ることができます。また、バードウォッチングを楽しむ場合も、なかなか見ることができないケツァールを見られそうな場所を知らせてくれるなど、ガイド料を支払う価値は十分あります。ガイド料は、半日のバードウォッチングで50US\$程度。トレッキング前に地域情報がまとめられたビデオを鑑賞するコースもあり、より理解が深まる工夫もされています。

モンテベルデではガイド協会が設立され、自然保護区のガイドだけでなく、地域の生態系や歴史に関するレクチャー、付近の小中学校などと協力した植林プログラムの実施なども行っています。また、毎年、大学で数週間の研修が義務付けられるなど、教育立国ならではのようです。ガイドの質は非常に高く、どんな質問にも丁寧に答えてくれ、教養面だけでなく、接客面においてもプロ意識の高いガイドばかりです。

ガイドに求められる知識は、自然に関するものだけでなく、地球全体の環境や生態系、社会、文化、歴史、風土など幅広いのですが、今年からコスタリカ政府観光局では、全観光ガイドに対して試験を課し、合格者にライセンスを発行する制度をスタートさせるといわれています。試験分野は自然科学から社会科学、人文科学まで多岐にわたり、今後、エコツーリズムを目指す地域からも注目を集めそうです。

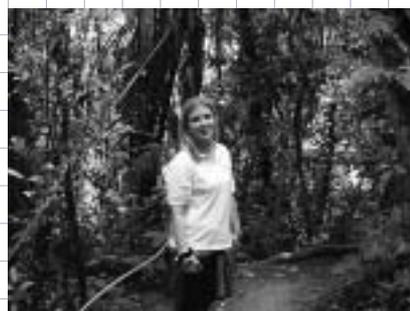
ところで、コスタリカは、地域が一体となって自然を守り、エコツーリズムを推進している国であることも大きな特徴です。先ほどのサンタ・エレナ自然保護区をはじめ、ホテルなどの観光産業が共同で一定の資金を積み立て、それを自然保護活動に充てている例もあります。トルトゥゲーロ国立公園付近では民間団体がウミガメの

観察や保護活動を行いながら、ツアー客にウミガメの生態をレクチャーするなど、NGOなどの民間団体がさまざまな形で観光産業にかかわっています。地域社会が一体となって、自然資源を守り、かつ、ツアー客に対しても多面的な接点を持っていることで、観光産業への理解が深まるともいえましょう。

## マスツーリズムからエコツーリズムへ

国内GDPの8.7%を占めるといわれるコスタリカの観光産業は、地域が自立するツールとしてエコツーリズムが一つの方策であることを物語っているのではないのでしょうか。日本全体の観光産業のGDPは2.2%と、まだまだ程遠いものがありますが、観光消費を地域でしっかりと受け止めていく仕組みづくりをいかに地域全体で構築していくかが大きな鍵といえるでしょう。

大量の観光客を受け入れるマスツーリズムから、少人数、滞在型のエコツーリズムに転換することは、現実的にはなかなか難しいことかもしれません。しかし、自然保護の理念をしっかりと築きながら安定した観光産業を定着させ、自然と経済の共生を実現させたコスタリカのエコツーリズムには、学ぶべきことが数多くあるように思います。



# 開発DIARY 9月

2日

## 100万都市シンポジウム「命をむ北の大地のめぐみ」

—農政改革と地域資源の行方—

13:30～17:00 札幌共済ホール

基調講演「農政改革と農村地域資源の保全」

生源寺 眞一氏（東京大学大学院農学生命科学研究科教授）

映像ショー「宇宙から見た北海道の地域資源」

事例紹介「北海道の地域資源の現状と課題」

大山 裕氏（虹別連合振興会副会長）

パネルディスカッション「北海道の地域資源」

パネリスト：生源寺 眞一氏 / 梅田 安治氏（北海道大学名

誉教授・農村空間研究所長） / 黄倉 良二氏（きたそら

ち農業協同組合代表理事組合長） / 大山 裕氏 / 吉田 弘

志氏（鹿追町長）

司会・進行役 小日向 徳子氏（フリーキャスター）

主催 / 北海道開発局、全国農村振興技術連盟北海道地方連  
盟協議会、水土里ネット北海道（北海道土地改良事  
業団体連合会）

共催 / 北海道、北海道農政事務所、北海道統計・情報事務  
所等

後援 / 独立行政法人農業・生物系特定産業技術研究機構北  
海道農業研究センター、NPO法人わが村は美しく  
北海道ネットワーク等

参加無料

問い合わせ / 北海道開発局 農業水産部農業設計課

(011) 709-2311 内5556

水土里ネット北海道 水土里推進室

(011) 221-2292

4日

## SABOウォッチング

8:45～16:10 集合・解散：地下鉄真駒内駅前

札幌河川事務所洪水対策室見学 / 災害対策用機械見学 /

VTR「SABO（さぼう）ってなあに？」 / 砂防施設ジオラ

マ実験教室 / オカバルシ川・穴の川の砂防施設見学 / 手づ

くり音楽会

対象 / 小学校4年生から6年生までで所定の場所で集合・解

散できる児童 定員100名

主催 / 砂防フェア実行委員会（石狩川開発建設部、札幌土

木現業所、札幌市）

問い合わせ / 北海道河川防災研究センター「砂防フェア

実行委員会事務局」（011）729-8141

9日

## 函館地区道路技術者実務講習会

9:00～16:00 函館建設業協会3階講堂

定員 / 100名

受講料 / 5,000円（テキスト代含む）

主催 / 北海道道路管理技術センター

函館建設業協会

後援 / 函館開発建設部

問い合わせ / 北海道道路管理技術センター

(011) 736-8577

11日～12日

## 北の家づくりフェア2004

「あったか 長持ち ともに育む北の住まい」

サッポロファクトリーアトリウム・ファクトリーホール

11日13:00～14:50 北の家づくりフォーラム

プレゼンテーション

道内在住30代建築家の「北の家づくり」

トークセッション

「めざせ!あったか 長持ち ともに育む北の住まい」

赤坂真一郎氏（アカサカシンイチロウアトリエ一級

建築士事務所代表） / 湊谷みち代氏（一級建築士事務

所m+o） / 畠中秀幸氏（有スタジオ・シンフォニカ代

表）

コーディネーター おびなた徳子氏（フリーキャスター）

12日13:00～14:00 北の家づくりトークショー

がんばれマイホーム! 「年収300万円時代を生きる」

～豊かなライフスタイルを実現するために～

出演：森永 卓郎氏（経済アナリスト）

聞き手：おびなた 徳子氏（フリーキャスター）

各種住宅セミナー / 北の家づくりパネル展 / 住宅相談コー  
ナー / スライド・ビデオ・DVD上映 / 実験コーナー / 道産  
材木製品展ほか

主催 / 北海道

共催 / 札幌市、住宅金融公庫北海道支店、北海道建築指

導センター、北海道木材利用推進協議会

後援 / 北海道開発局、北海道マンション管理組合連合会、

マンション管理センター、北海道住宅建築協会、

北海道建築士会、北海道建築設計事務所協会、

ノーマライゼーション住宅財団、北海道住宅リ

フォームセンター、北海道建築技術協会、北海道

建築工事業組合連合会、北海道まちづくり促進

協会、日本ツーバイフォー建築協会北海道支部、

プレハブ建築協会北海道支部、日本建築家協会

北海道支部、日本建築学会北海道支部、北海道新

聞社

12日

## 第23回航空ページェント

8:30～15:00 札幌飛行場（陸上自衛隊丘珠駐屯地）

主催 / 北海道航空協会、北海道スカイスポーツ協会

後援 / 国土交通省、日本航空協会

問い合わせ / 北海道航空協会（011）261-6111

13日 ~ 17日

ISCORD2004 第7回寒地開発に関する国際シンポジウム  
ホテルロイトン札幌・札幌市教育文化会館・道立近代美術館

特別講演

「北国と私と日本画」中野 邦昭氏（日本画家）

「北の地域開発：機会と挑戦」

ハンス・ファン・ヒンケル氏（国連大学学長）

基調講演

「寒冷地域開発の人類史的意義：文明の進化に向けて」

佐々木 晴美氏（IACORDS事務総長・北海道開発技術センター顧問）

主催 / 国際寒地開発研究協会（IACORDS）

ISCORD2004日本・北海道実行委員会

後援 / 国連大学、文部科学省、国土交通省、経済産業省、  
関係学会・団体など

問い合わせ / 北海道開発技術センター内

ISCORD2004日本・北海道実行委員会事務局

総括班幹事（高西・佐賀）

（011）271-3028 www.iscord2004.com

17日

小樽地区道路技術者実務講習会

9:00 ~ 16:00 小樽建設協会3階大会議室

定員 / 80名

受講料 / 5,000円（テキスト代含む）

主催 / 北海道道路管理技術センター

小樽建設協会

後援 / 小樽開発建設部

問い合わせ / 北海道道路管理技術センター

（011）736-8577

18日

オトリゾートフォーラムin道東

10:00 ~ 15:30 丸瀬布いこいの森オートキャンプ場

基調講演

「滞在型旅行時代のオトリゾートの役割と課題」

伏島 信治氏（伏島事務所代表・NPO法人北海道観光パ  
ジョンアップ協議会副会長）

パネルディスカッション

パネリスト：管野 真一氏（丸瀬布観光協会会長） / 喜田

和孝氏（丸瀬布町教育委員会学芸員） / 小山 信芳氏

（丸瀬布町商工観光課公園管理係長兼観光係長） / 市原

良子氏（自営業（農家））

コーディネーター

小林 昭裕氏（専修大学北海道短期大学教授）

アドバイザー 伏島 信治氏

アウトドア体験

ホーストレッキング / クラフト教室 / アウトドアクッキ

ング / ガーデニング教室

主催 / 北海道オトリゾートネットワーク協会

主管 / 道東地区オトリゾートフォーラム実行委員会

後援 / 網走開発建設部、北海道網走支庁、オホーツクDOI

なか博推進委員会、丸瀬布町、丸瀬布いこいの森オ

ートキャンプ場、三里浜オートキャンプ場（湧別町）、

道立オホーツク公園オートキャンプ場（網走市）、清

里オートキャンプ場（清里町）、さらべつカントリー

パーク（更別村）、十勝4駆ランド・オートキャンプ  
場（音更町）、道立十勝エコロジーパークオートキャ  
ンプ場（音更町）、山花公園オートキャンプ場（釧路  
市）、達古武オートキャンプ場（釧路町）、つるい村  
民の森オートキャンプ場（鶴居村）、桜ヶ丘森林公園  
オートキャンプ場（弟子屈町）、虹川オートキャンプ  
場（標茶町）、オホーツク委員会、網走支庁管内観光  
連盟、丸瀬布観光協会、オホーツク21世紀を考える  
会、NHK北見放送局、北海道新聞北見支社

問い合わせ / 道東地区オトリゾートフォーラム実行委員会  
（01584）7-2211（丸瀬布観光協会・高橋）

18日 ~ 19日

全日本紙飛行機選手権大会

ヤマハリゾートキロロ

18日12:00 ~ 18:00

滞空競技敗者復活戦 / デザイン競技 / ふれあい競技

19日8:00 ~ 16:30

開会式 / 滞空競技決勝 / ジャンボ紙飛行機競技 / 表彰式

両日だれでも参加できるイベント 参加無料

紙飛行機作り方・飛ばし方教室 / トベトベコンテスト

（当日参加競技） / フライトゲーム・アトラクション

主催 / 日本紙飛行機協会

後援 / 文部科学省、国土交通省、北海道、北海道教育委員  
会、北海道赤井川村、赤井川村教育委員会、北海  
道スカイスポーツ協会、（独）宇宙航空開発機構、航  
空振興財団、全国少年自然の家連絡協議会、全国科  
学館連携協議会、全国青年の家協議会、日本ユ  
ニセフ協会、アメリカ国立スミソニアン航空宇宙博  
物館

連携協力 / 2005年日本国際博覧会協会

運営協力 / 北海道紙飛行機を飛ばす会、たんぼぼクラブ

問い合わせ / （0120）461-283

www.whitewings.com/japan/

21日

第4回寒地道路連続セミナー

13:30 ~ 17:00 独立行政法人北海道開発土木研究所講堂

テーマ / 感性工学から道づくりへのアプローチ

基調講演

「感性工学からの道づくりと社会的合意形成プロセス」

桑子 敏雄氏（東京工業大学大学院教授）

話題提供

「感性工学から地域づくりへのアプローチ」

須田 清隆氏（ジオスケープ）

主催 / 独立行政法人北海道開発土木研究所・北海道開発局

30日

平成16年度第2回環境セミナー

13:30 ~ 札幌エルプラザ4階ホール

主催 / 北海道開発局

問い合わせ / 北海道開発局 開発監理部開発環境課

（011）709-2311 内5434

2004.9.15wed ▶ 9.20mon

SCHEDULE 競技距離 . . . . . 763Km

日程	ステージ	区間	距離
9月15日(水)	プロローグ(タイムトライアル)	札幌市	2.6Km
9月16日(木)	第1ステージ(ロードレース)	札幌市～伊達市	185Km
9月17日(金)	第2ステージ(ロードレース)	虻田町～長万部町	174Km
9月18日(土)	第3ステージ(ロードレース)	八雲町～上磯町	187Km
9月19日(日)	第4ステージ(ロードレース)	七飯町～函館市	157Km
9月20日(月・祝)	第5ステージ(クリテリウム)	上磯町	60Km
合計 6日間 36市町村(4市28町4村)			

第18回 ツールド・北海道国際大会 市民参加競技日程

日程	種目	区間	距離
9月15日(水)	個人タイムトライアル	札幌市	2.6Km
9月18日(土)	個人ロードレース	乙部町～上磯町	65Km
9月20日(月・祝)	クリテリウム	上磯町	20Km

your energy leads to the victory.



TOUR DE HOKKAIDO

TOUR DE HOKKAIDO 2004

財団法人 ツールド・北海道協会  
 〒060-0304 札幌市中央区北4条西6丁目1-3 北4条ビル4F  
 TEL (011)232-5922 FAX (011)232-4604  
<http://www.tour-de-hokkaido.or.jp>  
 E-mail: [tourde@seagreen.pcn.ne.jp](mailto:tourde@seagreen.pcn.ne.jp)



# オーライ!ニッポン 北海道シンポジウム

—くればいいっしょ!!北の大地へ—

開催日時 平成16年9月10日(金) 14:00~17:30

開催場所 札幌市

**第1部 シンポジウム「道新ホール」** 定員700名 参加無料  
札幌市中央区大通西3丁目6 道新大通館8階  
TEL011-221-2422

14:30~ 基調講演

「21世紀の幸せはどこに

—グローバルよさようなら ローカルよこんにちへ—

東京大学名誉教授・国土緑化推進機構理事長 木村 尚三郎氏

15:30~ パネルディスカッション

「すばらしい素材を温かいところでおもてなし」

コーディネーター 北海道新聞社常務取締役 渡辺 藤男氏

パネリスト 北海道由仁町長 斎藤 外一氏

食農わくわくネットワーク北海道事務局長 長尾 道子氏

(有)クレスガーデン代表取締役 干場 一正氏

こぶしの会代表 山川 八重子氏

17:15~ 都市と農山漁村の共生・対流~北海道宣言

北海道ツーリズム協会理事長 中野 一成氏 ほか有志一同

主催 / オーライ!ニッポン会議

共催 / 北海道 国土交通省北海道開発局 農林水産省

(財)都市農山漁村交流活性化機構

後援 / 総務省 文部科学省 厚生労働省 経済産業省 環境省

**第2部 交流会「京王プラザホテル札幌」** 定員200名  
札幌市中央区北5条西7丁目 TEL011-271-0111

18:00~ 「手づくり交流会~お母さんたちの美味しい味」

主催 / 都市と農山漁村交流実行委員会

協力 / NPO法人わか村は美しく 北海道ネットワーク

ホクレン農業協同組合連合会

北海道漁業協同組合連合会

北海道土地改良事業団体連合会

参加費 / 3,500円

関連行事

ふれあいフェスタin赤レンガ

日時: 9月11日(土) 場所: 道庁赤レンガ庁舎前

フードランド北海道2004

日時: 9月10日(金)~10月11日(月)

場所: 札幌大通公園ほか

申込・問い合わせ

北海道農政部農村計画課グリーンツーリズムグループ

TEL011-231-4111 (内線27-418) FAX011-232-1086

<http://www.pref.hokkaido.jp/nousei/ns-nkkak/index.htm>





青い空、見よう！



第11回ジャパンカップ(愛・地球博パートナーシップ事業)  
日本紙飛行機協会設立20周年記念

# 全日本紙飛行機選手権大会

●とき●

2004年 9月18日(土)・19日(日)

12:00~18:00(予定) 8:00~16:30(予定)

●ところ●

ヤマハリゾート キロロ(北海道赤井川村)

〒046-0593 北海道余市郡赤井川村 キロロ総合案内 TEL(0135)34-7111  
札幌西インターから約50分、小樽からは約30分

●主催

 日本紙飛行機協会

●後援/文部科学省、国土交通省、北海道、北海道教育委員会、北海道赤井川村、赤井川村教育委員会、(社)北海道スカイスポーツ協会、(独)宇宙航空開発機構、(財)航空振興財団、全国少年自然の家連絡協議会、全国科学館連携協議会、(社)全国青年の家協議会、(財)日本ユニセフ協会、アメリカ国立スミソニアン航空宇宙博物館

●協賛/本田技研工業、トヨタ自動車、ソニー、NTT東日本、NTTドコモ、NTTデータ、NTT-AT、ANA、誠文堂新光社、東海パルプ、AG 他

●連携協力/財団法人2005年日本国際博覧会協会

●運営協力/北海道紙飛行機を飛ばす会 たんぽぽクラブ

滞空競技  
Aクラス優勝者に  
ANAで行く  
グアムまたはソウル  
往復航空券をペアで。  
Bクラス優勝者には  
特製ANA機レプリカ  
プレゼント。

2004年 9月18日(土)

- 滞空競技敗者復活戦
- デザイン競技
- ふれあい競技

2004年 9月19日(日)

- 開会式 AM8:30~(予定)
- 滞空競技決勝
- ジャンボ紙飛行機競技
- 表彰式

無料

両日だれでも参加できるイベント

両日とも会場にて、先着500名様に  
競技用「ホワイトウイングス」組立キットプレゼント!

- 紙飛行機作り方・飛ばし方教室
- トベトベコンテスト(当日参加競技)
- フライトゲーム・アトラクション

小さなお子様も楽しめる楽しいゲームがいっぱい!  
(楽しい賞品を多数用意しています)

●お問い合わせ

しろい つばさ

 0120-461-283

<http://www.whitewings.com/japan/>

# オートリゾートフォーラム

## in 道東

AUTORESORT FORUM  
2004 IN DOHTOH



日時

平成16年 **9 / 18** (土)  
10:00~15:30

会場

**丸瀬布いこいの森オートキャンプ場**  
紋別郡丸瀬布町上武利 TEL.01584-7-2211

基調講演

13:00~14:00

### ～滞在型旅行時代のオートリゾートの役割と課題～

伏島 信治氏 伏島事務所代表 NPO法人北海道観光バージョンアップ協議会副会長

パネルディスカッション 14:00~15:30

パネリスト

管野 伸一氏

丸瀬布観光協会会長

喜田 和孝氏

丸瀬布町教育委員会学芸員

小山 信芳氏

商工観光課公園管理係長兼観光係長

市原 良子氏

自営業(農業)

コーディネーター

小林 昭裕氏

専修大学北海道短期大学教授

アドバイザー

伏島 信治氏

アウトドア体験

10:00~15:30

- ホーストレッキング ●クラフト教室
- アウトドアクッキング ●ガーデニング教室

体験は無料です。  
お気軽に参加してください。

※雨具と防寒対策は  
各自お願いします。



主催 / (社)北海道オートリゾートネットワーク協会 主管 / 道東地区オートリゾートフォーラム実行委員会

後援 / 網走開発建設部、北海道網走支庁、オホーツクDOいなか博推進委員会、丸瀬布町、丸瀬布いこいの森オートキャンプ場(丸瀬布町)、三里浜オートキャンプ場(湧別町)、道立オホーツク公園オートキャンプ場てんとらんど(網走市)、清里オートキャンプ場(清里町)、さらべつカントリーパーク(更別村)、十勝4駆ランド・オートキャンプ場(音更町)、道立十勝エコロジーパークオートキャンプ場(音更町)、山花公園オートキャンプ場(釧路市)、達古武オートキャンプ場(釧路町)、つるい村民の森オートキャンプ場(鶴居村)、桜ヶ丘森林公園オートキャンプ場(弟子屈町)、虹別オートキャンプ場(標茶町)、オホーツク委員会、網走支庁管内観光連盟、丸瀬布観光協会、オホーツク21世紀を考える会、NHK北見放送局、北海道新聞北見支社

お申し込み  
お問い合わせ先

道東地区オートリゾートフォーラム実行委員会 (丸瀬布町役場内 丸瀬布観光協会・高橋)

TEL 01584 (7) 2211 FAX 01584 (7) 2128

## 平成17・18年度北海道開発局競争参加資格 審査申請説明会開催のご案内

財団法人 北海道開発協会  
社団法人 北海道建設業協会

平成17・18年度の北海道開発局における建設工事および測量等に関する競争参加資格審査申請の手続きについて、下記のとおり説明会を開催します。

資格審査の定期受付では、平成15・16年度と同様にインターネットによる申請ができますので、申請手続きの事務軽減のためにも多くの方が参加されますようご案内いたします。

月日・曜日	地区	会場	住所	開催時間
10月18日	釧路	釧路建設業協会 3階会議室 TEL (0154) 41-7447	釧路市富士見1丁目3-2	13:00 ~ 15:30
10月19日	帯広	帯広建設業協会 4階会議室 TEL (0155) 24-5309	帯広市西7条南6丁目2	9:30 ~ 12:00
10月20日	留萌	留萌建設協会 2階会議室 TEL (0164) 42-0965	留萌市寿町2丁目	13:00 ~ 15:30
10月21日	小樽	小樽建設協会 3階会議室 TEL (0134) 24-0158	小樽市花園2丁目10-24	13:30 ~ 16:00
10月21日	旭川	旭川建設業協会 4階会議室 TEL (0166) 22-5144	旭川市5条通5丁目左10号	9:00 ~ 11:30 13:00 ~ 15:30
10月22日	網走	網走建設業協会 3階会議室 TEL (0152) 43-2519	網走市南2条西3丁目	14:00 ~ 16:30
10月25日	苫小牧	苫小牧市民会館 小ホール TEL (0144) 33-7191	苫小牧市旭町3丁目2番2号	13:00 ~ 15:30
10月26日	札幌	北海道開発協会 6階会議室 TEL (011) 709-5215	札幌市北区北11条西2丁目 セントラル札幌北ビル	9:30 ~ 12:00 13:30 ~ 16:00
10月26日	室蘭	室蘭建設業協会 1階講堂 TEL (0143) 22-1045	室蘭市入江町1-74	9:30 ~ 12:00
10月27日	函館	函館建設業協会 3階会議室 TEL (0138) 26-6711	函館市大森町19-6	9:30 ~ 12:00 13:00 ~ 15:30
10月28日	稚内	稚内建設協会 2階会議室 TEL (0162) 33-5364	稚内市末広4丁目4-2	14:30 ~ 17:00
10月29日	札幌	北海道開発協会 6階会議室 TEL (011) 709-5215	札幌市北区北11条西2丁目 セントラル札幌北ビル	9:30 ~ 12:00 13:30 ~ 15:00

説明会の内容は、北海道開発局の競争参加資格申請についての手続きに関するものです。

手続きに関する説明は、インターネットを利用した申請方法を中心に、紙申請による方法についても説明します。

説明会では、当日各会場で販売する「申請の手引」により説明を行います。なお、紙申請に必要な申請書類（様式）については、北海道開発局工事管理課のホームページに掲載されています。

説明会出席希望の方は、出席希望日時を希望日の1週間前までに、出席申込書を北海道開発協会にFAXでお送りください。午前・午後開催の会場は、どちらか希望する時間帯を選択してください。なお、希望された時間通りにならない場合がありますので、あらかじめご了承ください。

10月29日の札幌地区開催の午後の部は、「測量・コンサル」のみ申請される方を対象としますのでご注意ください。

出席申込書の取り寄せ・お申し込み・お問い合わせ先

北海道開発協会 研修出版部 TEL (011) 709-5215 FAX (011) 709-5226

知床の世界自然遺産登録を契機に、エコツーリズムへの関心が高まっている。地域にとっては、集客が増えることへの期待と自然への負荷が高まることへの懸念が交錯しているようだ。貴重な自然を次世代に責任を持って引き継ぎながら、地域の再生、安定につなげていく地域プランの創出が今こそ求められている。屋久島の10年にわたる教訓、ブナ北限の里づくりに向けた黒松内の取り組みなど、学ぶべき貴重な経験が足元にある。(S.K)

エコツーリズムは立場によってとらえ方がさまざままで、海外の先進事例情報もまだ不足しているように思います。早くからこの分野で活動してきた人にしてみれば、読み終えた後で納得のいかない部分もあるかもしれません。でも、第一歩はエコツーリズムの魅力とその考え方を広く理解してもらうことだと感じます。エコツーリズムは北海道に適した観光のあり方の一つの柱となるはずです。(M.S)

● マルシェノルド バックナンバー

- 第1号 「地域経済の自立に向けて」('99年9月25日発行)
- 第2号 「北海道ツーリズムを考える」('00年1月25日発行)
- 第3号 「都市と商業」('00年6月25日発行)
- 第4号 「循環型社会を目指して」('00年10月25日発行)
- 第5号 「地域とアート」('01年2月25日発行)
- 第6号 「地域とIT」('01年6月25日発行)
- 第7号 「北海道の食産業を考える」('01年10月25日発行)
- 第8号 「NPOのあり方を考える」('02年2月25日発行)
- 第9号 「北のものづくり」('02年8月25日発行)
- 第10号 「地域経済の自立的発展と観光産業」('03年2月25日発行)
- 第11号 「地域景観とまちづくり」('03年8月25日発行)
- 第12号 「地域と大学」('04年2月25日発行)

● 表紙の切り絵作家  
三苦 麻由子

東京都出身。武蔵野美術短大卒業後、広告代理店勤務などを経てフリーに。'94年札幌へ。みとままゆこのペンネームで、水彩、ペン、墨絵、切り絵など、さまざまなタッチでジャンルにこだわらず活躍中。本誌の表紙は、本号テーマ・イメージによるオリジナル作品。

「マルシェ:marché」とはフランス語で市場のこと、同音の「マルシェ:marcher」には歩む、行進する、進歩するという意味もあります。北海道(ノルド:nord=北)が多くの人々が集い、交流し、活気あふれる地域へ発展するようとの願いを込めて、「開発こうほう」の地域経済レポート特集号として「マルシェノルド」(年一回、九・三月号を予定)をお送りします。地域を考えるきっかけとなるように、毎号、地域経済特有のテーマを取り上げてまいります。

● 理解を深めるために……

Books

※インタビュー

『ふれあいと出会いのオーストラリア』

オーストラリア政府観光局監修

『オーストラリアの大自然を楽しむ本』

河出書房新社

『エコツーリズムってなに?』 ほか

小林寛子著/河出書房新社

※地域事例1 知床

『知床国立公園パークガイド 知床』

自然公園財団編

『知床の人と自然』 ほか

斜里町立知床博物館編

※地域事例2 屋久島

『10年の歩み』

屋久島環境文化財団

『新たな屋久島へ、この10年の変化を踏まえて』 ほか

環境省(共生と環境の地域社会づくりモデル事業報告)

※地域事例3 美瑛・富良野地域

『自然体験活動・貴重な自然資源の活用等を通じた地域活性化方策調査』 ほか

国土交通省北海道局

※レポート コスタリカ

『コスタリカを知るための55章』

国本伊代編著/明石書店

『地球の歩き方 中米』

地球の歩き方編集室編著/ダイヤモンド社

『コスタリカ-自立を目指す美しい自然の小国』

小磯修二著(『Hoppoken 第125号』掲載)

『岐路に立つコスタリカのエコツーリズム』 ほか

城殿博著(『モーリー No.3』掲載)

● 開発こうほう / 地域経済レポート特集号 | KAIHATSUKOHO  
Regional Economic Report

マルシェノルド

● ご意見・ご感想をお寄せ下さい。

北海道開発協会 企画広報部

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目 セントラル札幌ビル

TEL: 011 (709) 5212 E-mail: pr-div@hkk.or.jp

開発こうほう 第494号 平成16年8月25日

発行 北海道開発協会

編集協力 釧路公立大学地域経済研究センター

印刷所 須田製版 不許複製

http://www.hkk.or.jp/

## クリーンロード北海道

### 営業品目

- 一般土木工事
- しゅんせつ、樋門、樋管清掃工事
- 管渠、側溝、路面清掃工事
- 除雪、排雪工事



豪雨災害の福井県へ、復旧ボランティア（路面清掃車2セット派遣）



# 北海道ロードメンテナンス

代表取締役 三好 博  
 取締役副社長 大野 末治  
 専務取締役 早坂 恵慈  
 常務取締役 村椿 紀幸  
 道東支店  
 取締役支店長 太田 幹雄

本社 札幌市中央区北1条東12丁目22番地  
 道東支店 北見市東相内町110番17  
 発寒事業所 札幌市西区発寒15条12丁目1-25  
 常盤事業所 札幌市南区常盤356番地2  
 北見事業所 北見市東相内町110番17  
 旭川営業所 旭川市永山6条4丁目13  
 道南営業所 函館市大川町14番地24号  
 釧路営業所 釧路市大町8丁目1番12号  
 帯広営業所 帯広市南町東5条5丁目30

電話 (011) 241-1692  
 FAX (011) 241-7774  
 電話 (0157) 36-9811  
 FAX (0157) 36-9812  
 電話 (011) 665-3259  
 電話 (011) 592-6512  
 電話 (0157) 36-9811  
 電話 (0166) 47-5245  
 電話 (0138) 43-7150  
 電話 (0154) 41-3846  
 電話 (0155) 48-7383



PLANNING & PRODUCE OF YOUR WORK STYLE  
 FUKUSHIMA Industry Co.,Ltd.



## 取扱商品

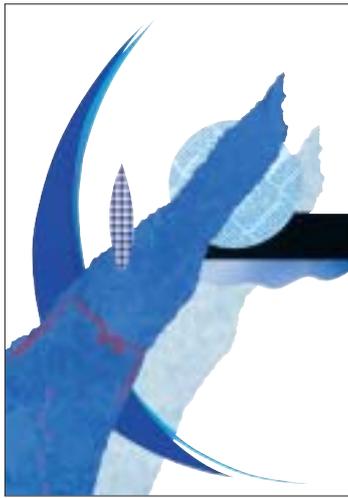
- ◆作業服・防寒服・事務服等ユニフォーム全般
- ◆レインウエア
- ◆保安帽（ヘルメット）  
作業帽・防寒帽
- ◆安全靴・長靴・防寒靴
- ◆保安用品
- ◆テント（日除けテント・集会用テント・テント倉庫）
- ◆シート（養生シート・クロスシート・野積シート）



サカエ福島産業株式会社

〒003-0003 札幌市白石区東札幌3条3丁目7-21

TEL(011)811-4652 FAX(011)842-3372 E-Mail sakae-fukushima@luck.ocn.ne.jp



- THEME -

## 【跡】

残すことができるものは、足跡だけ。  
持ち帰ることができるものは、思い出だけ。  
人間はどれだけ謙虚で慎ましく、  
自然に配慮して生きていくことができるのか。  
森の民の声を聞くことが、  
その術を知る大きな手がかりになるはずだ。



財団法人 北海道開発協会

001-0011 札幌市北区北11条西2丁目セントラル札幌北ビル

TEL (代表) 011-709-5211